

## 明治初年の静岡藩の学校教育

—静岡学問所と沼津兵学校及び同附属小学校を中心にして—

影 山 昇

## Establishment of Modern Schools in the Shizuoka-clan in the early Meiji Period

Noboru Kageyama

### Abstract

With the Meiji Restoration of 1868, the Meiji government appointed Iesato Tokugawa, the master of the Tokugawa family, as governor of the Shizuoka-clan.

The Tokugawa administrator was an earnest promotor of education, and established modern schools mainly in Shizuoka and Numazu for the study of foreign books and languages, western military organization and science.

In this article the author attempts to research schools established by the Tokugawa administrator in the Shizuoka-clan during the early Meiji period.

### キーワード

明治維新 徳川家 静岡藩 静岡学問所 沼津兵学校 軍医養成 沼津  
兵学校附属小学校 静岡藩立小学校

### はじめに

幕藩体制の崩壊に伴う徳川家の駿河・遠江・三河の3国への転封後、徳川家は教育事業として静岡学問所と沼津兵学校・同附属小学校、さらには静岡藩内各地に初等教育機関を設立しており、本論稿では、これら一連の教育機関が日本近代教育史上で果たした役割を、その教育実態の解明を通じて考察する。

## I. 徳川家の転封と教育事業への取り組み

徳川慶喜が大政を奉還して徳川幕府が崩壊し、徳川家達が田安家より入って後嗣となり、駿河・遠江・三河の3国70万石に封ぜられたことで、慶喜・家達ともに駿府に移り住んだが、旧幕臣の多くも主君に従っている<sup>1)</sup>。

徳川幕府崩壊後の諸侯は、家臣を引連れてその所領地に引揚げていったわけだが、旧幕臣の場合は①脱走②明治政府の官員③帰農商④駿河への移住、以上の4派に分かれた<sup>2)</sup>。

このなかで駿河への移住者全般についていえば、「当時無禄移住を覚悟して駿遠参へ移住せし人数は、駿河府中六百九十四人、浜松七百二十一人、掛川七百〇一人、遠州横須賀六百八十二人、赤坂六百二十八人、田中六百五十二人、相良七百六十人、中泉七百二十九人、参州横須賀六百〇六人、小島三百九十九人、合計六千五百七十二人。以上は皆一家の主のみを数へしにて、家族一家平均三人とすれば、一万九千七百十六人。四人とすれば二万六千二百八十八人となる。以外沼津地方へ入り込みし人数、数千人ありし故、大略四万有余の人口は此等の地方へ移りしことにて、其他領知へ行きし者近在へ帰農せし者、商となりて転居せしも多<sup>3)</sup>」かった。

ところで徳川家の所領となった藩の中心は駿府で、家達を支える藩の首脳には欧米諸国の事情に明るい人材が多く、明治2巳年新刻の『駿府藩官負録』には、御家老に平岡丹波、幹事役は勝安房（海舟）・山岡鉄太郎（鉄舟）、陸軍学校頭取に西周助、学問所頭には向山黄村や津田真一郎（真道）といった名前がある。さらに学問所の教授方として中村敬助（正直）・杉亨二・外山捨八郎（正一）、大目付には加藤弘蔵（弘之）の名前も見出される<sup>4)</sup>。

では、どうして徳川家が教育という大事業に着眼したのであろうか。

それは、それまでの日本の伝統的な教育を継承しつつ、これまで欠落していた数理を中心とする西欧諸国の文明の長所を果敢に吸収し、転封先の駿河の地で、これからの日本の文化の発展の主演を演じていこうとする気概を具体化することで、幕府崩壊という徳川家の屈辱を拭わんとしたことによるとみるのが妥当であろう。

そのことは、大森鐘一の「偶感私記・静岡の藩校と余の幼少時代」の一節によっても裏付けられる。

明治の初静岡藩に出来た学校は、当時に在りては各藩に卒先し、藩としては大なる誇であった。(中略)維新前は何処も同じで、大藩の処ですら一の藩に漢学の学校が一つ位あったのみで、他は皆寺子屋式の通俗や幼稚極まるもののみであった。静岡でも矢張りこの種の状況で、江戸の昌平黉の分校みたいなものが維新前数年の頃初めて出来て之を明新館といひました。勿論純然たる漢学の学校で、其学頭即校長と教頭を兼ねた様なものが一人、昌平黉の儒者から毎年交代で来てゐました、(中略)吾々も幼年の頃は此学校に居ました、是が維新迄の唯一の教育機関でした。戊辰以後に始めて藩が出来ました、(中略)そこで藩が出来ると直ぐ其八月に静岡城内四ツ足門内に元御定番屋敷跡へ学問所を開くといふ事が発表されました。(中略)其十二月には沼津に兵学校が開校されました。明治

三四年の頃四ツ足門内に一の小学所といふものが設けられたした。(中略)又同年頃静岡以外数ヶ所に小学校が設けられましたが、(中略)是は十分整頓せぬ内に廃藩となり、後に文部省の学制に従て今の小学校になりました、兎も角当静岡藩は僅か数年の間に教育の事に力を用ゐられました事が分かります<sup>5)</sup>。

徳川家によるこうした藩内での教育事業の遂行を可能としたことの一つは、それまでに以下で指摘するような条件が整っていたこともあずかって力があつた。

つまり、「維新前江戸に於て蕃書調所が開かれ、其後開成所となり、開成学校となりましたが、(中略)徳川家が静岡に移る際に此学校の先生や本の大部分が静岡へ移ったので即ち昔の江戸の開成所が静岡へ移されたと思つてもよいのです。又維新前幕府が仏蘭西の教師を備て仏国の制に倣ひて陸軍を組織しようとしたましたが第一仏蘭西語の出来る者が少かつたので先づ語学所を開きましたが、維新の変で解散して其先生達や生徒も幾分静岡に移りました。此等の事情の為に静岡に明治元年八月開かれた学校は、昔一ツ橋外に在った開成所と横浜の語学校と昌平黉の漢学の学校と三つを合併した様なものであ<sup>6)</sup>」<sup>7)</sup>ったところから、当時にあつてすでに最高の教授陣で教育の成果を挙げていく下地があつたからである。

## II. 府中（静岡）学問所と静岡藩立小学校

### 1. 府中（静岡）学問所の設立と教育の展開

明治元年（1868）8月15日、徳川家達は駿府・府中の地に「到着其九月八日左ノ布令アリ以テ移転紛擾ノ際ト雖トモ学事ニ汲々タリシヲ視ル」<sup>7)</sup>ことができる。

今般四ツ足御門内御定番屋敷ニ於テ御国学洋学共相開相成候ニ付有志ノ者ハ身分ノ貴賤ニ限ラス出席修業イタシ候可被致候就テハ出席手續ノ儀ハ別紙ノ通可相心得候  
右ノ趣御家来中ハ勿論社寺并又者市在末々迄不洩様可被相触候

九月

別 紙

- 一 始テ学問所エ出席ノ者ハ朝五時<sup>5)</sup>四時迄ノ間銘々名札エ肩書宿所相認四ツ足御門<sup>6)</sup>入学問所御玄関エ向持参案内可申入候
- 一 講釈会読日割等ノ儀ハ御玄関エ出張シ有之候間始テ出席ノ節銘々ノ志ニ寄且ハ学問ノ浅深ニ寄り教官<sup>6)</sup>差図可致候

九月<sup>8)</sup>

ところで本「学問所」開設の布令に先立つ安政5年（1858）、当地にはすでに駿府学問所が設立されており、文久元年（1861）12月28日をもって明新館と改称され、通学生は300名に及び、蔵書数も和漢書200冊を有していた。だが幕末期の幕府財政の困窮のため明新館の年間経営のための50両の費用が調達できず、慶応4年（1868）2月に廃館に追い込まれて

いる<sup>9)</sup>。

したがって、その後、半歳ほど経て改めて府中に「学問所」が開所される運びとなったことになる。

さて、林又三郎がはじめ学問所頭に任命され、府中学問所の開設の儀を委任されたものの、その準備の最中に駿州・小島奉行に転出することが決まり<sup>10)</sup>、その後任人事では明治元年(1868)11月8日、「向山黄村津田真一郎ヲ以テ学問所頭ト為シ漢洋一等教授ヨリ五等教授ニ至ル総計五十員俗務凡二十員」<sup>11)</sup>を決めている。

そして、この間の同年11月5日、「洋学開校布令」が出され、府中学問所は11月15日の開所と決定する。

#### 十一月五日洋学開校布令

今般府中学問所ニ於テ英吉利仏蘭独逸四ヶ国ノ学問来十五日迄御開ニ相成候ニ付御領地内武家社家出家百姓町人并其子弟厄介召仕等ニ至ル迄志アル輩ハ学問所エ罷越稽古可致事

但書物無之者ハ於御場所可承合事

一 御国学漢学洋学上達ノ者ハ仮令卑賤ノ者タリ共御取建可相成筈ニ付其心得ニテ出精可致事

一 入学ノ儀ハ三ヶ月ニ可為一度事

一 稽古ノ時刻ハ九半時迄七半時迄ニ可限右時刻ニ後レ出席ノ者ハ稽古不相成事  
右ノ趣向々エ不洩様可被相触候

十一月<sup>12)</sup>

しかしながら明治元年10月12日に出ている「学校移転布令」によると、“洋学開校”に先立つ1ヵ月以前の10月15日から府中学問所が仮開所され、すでにスタッフが揃っていたことから、漢学教授が開始されているのである。

#### 十月十二日学校移転布令

元御定番屋敷ヲ学問所ト相達置候処御都合モ有之候ニ付横内御門内元勤番組頭屋敷ヲ以来学問所ト相定来十五日仮御開相成候間子弟厄介并又市在末々ニ至迄漢学修業相願候者ハ同所御玄関エ罷出組頭并調役等エ可被承合候尤国学洋学ノ儀モ於同所追テ御開相成候事

十月<sup>13)</sup>

こうして開設された「府中」学問所は、明治2年(1869)6月20日から「府中」が「静岡」と改称されたことで、その後は「静岡」学問所と呼ばれるようになったが、学校名の呼称については、「駿府学校・駿府大学校・駿府洋学校・静岡藩学校等の別名」<sup>14)</sup>で呼称されることもあった。

また、そこでの生徒の修学状況については、開所早々に仏語科に入学し、後に学問所の

教員になった先にみた大森鐘一の当時の回想の記録によって、その一端を知ることができる。

予は仏蘭西科にゐました。是は仏蘭西の中学校位のもので、教科書は皆仏蘭西語で出来て居て、地理や歴史も数学も皆仏語で習ひました。そして兎も角仏語で法律の大要位までの書物をやりました。其頃私共が使った書物(中略)、是が曾て開成所にあったものです。(中略)学校の稽古の仕方も随分面白く、教室といふても畳の上に座り、机は寺子屋式のものでノートブックも半紙で帳面の様に綴ちたものであった。ペンや鉛筆なども持ってる者は至て少く矢立を腰にさして書いた者が多く、其頃は鉛筆の事を石墨と申し、私も父親に強請ってやっとペンや石筆を買って貰って珍重がったものでした。凡て其時代の事故諸君の想像だも及ばぬ事で、西洋紙など殆んど少く一枚でも実に尊く書物に至っては、容易に買へないし、グラムア一冊買ふにも態々横浜の人に頼むで買って貰ひ、手に入れば結構な程でした。字引なども学校に在るのみで、教科書なども学校の備へ本を借りて用ゐ、進級するときには下級生へ譲ったものでした。勿論和訳の字引等は殆んどなく、唯仏語明要といふのがあったが極めて幼稚のものでした。それは村上英俊といふ古い仏蘭西学者の著で、美濃紙に木版で刷り、日本筆で書いてあって黄色な表紙で四冊になってありました。尤も和訳の字書などは余り用ゐなかったものです。こんな風で、学生の苦心は実に容易なものでなく、今なら苦学生などゑらい名を付けられるのです。然しあの時分学生生活というものは之が普通でした。(中略)而して此学問所は先生及生徒の気分が人物を作るといふ点に在って、単に学問技術を修得するといふのでは無かったのです<sup>15)</sup>

以下、府中(静岡)学問所の特色を列挙してみることにする。

まず「有志ノ者ハ身分ノ貴賤ニ限ラス出席修業イタシ候」<sup>16)</sup>という趣旨に基づいて、「御領地内武家社家出家百姓町人并其子弟厄介召仕等ニ至ル迄志アル輩ハ学問所エ罷越稽古可致事」<sup>17)</sup>としていたところから、「士庶共学制」を原則としていたことが第1の特色として挙げることができる。

ついで、学問所への出席に関することで、「平服着用に而不苦候事」<sup>18)</sup>とあり、明治2年(1869)1月に開校した大学南校の“学生規則”ともいふべき「心得」中には「洋服着又ハ無刀無袴等ニ而出席(中略)但庶民トイヘトモ同断ノ事」<sup>19)</sup>と規定されている点と比較しても、学問所の方がより開明的な指向がみられる点が第2の特色である。

さらに伝統的な漢学教授に加えるに、教育内容面で英学や仏学を中心に蘭学や独逸学も含む西洋の学問、つまり“洋学”の占める位置をきわめて大きなものに行っているところに第3の特色がある。

そのことは、明治2年9月の『静岡藩官職吏員改正概略』中の静岡学問所・関係職員の一覧によりより明確となる<sup>20)</sup>。(「表1」参照)さらに数字で整理すると「表2」のようになる。

このような洋学重視の姿勢は、公費・県費で10名、私費で6名の合計16名もの海外留学

表 1 「静岡学問所」関係職員一覧

明治二年正月 (殿諸役名宛覽)		明治二年九月 (殿諸役名宛覽)		別 名	出自主な前歴
学問所頭向山黄村	津田真一郎 御建学師範 和漢御用取扱	小参事学校掛向山黄村 小参事片掛兼津田真一郎	河田照 津田真一郎	米五郎・準人正 實堂 實之助 真道	幕臣 慶応二、弘国万国博覧館に随伴 幕臣(德)外国局組頭 文久二、使節に 随伴渡欧、和蘭留学、開設所教授 津山藩士
一 等 教 授	中 村 敬 助	漢 中 村 敬 大 郎 漢 望 月 万 一 郎	敬 助(輔正直・) 毅 軒	敬 助(輔正直・) 毅 軒	幕臣、学問所教授、微典館学頭・英留 留學 る旧姓宮氏、推薦されて幕府儒官とな
二 等 教 授	望 月 万 一 郎 宮 原 寿 三 郎 長 田 銈 之 助 二 等 格 御 用 取 扱 杉 亨 二 東 條 礼 藏 名 村 五 八 郎 外 山 捨 八 郎 田 中 周 太 郎	漢 宮 原 寿 三 郎 英 名 村 五 八 郎 英 外 山 捨 八 郎 英 田 中 周 太 郎 漢 堀 越 五 郎 乙 弥 漢 長 谷 部 甚 弥	漢 宮 原 寿 三 郎 英 名 村 五 八 郎 英 外 山 捨 八 郎 英 田 中 周 太 郎 漢 堀 越 五 郎 乙 弥 漢 長 谷 部 甚 弥	木 石 銈 之 助 泰 藏 純 道 結 八 郎・正一・ 龜 之 助	二 等 教 授 の 筆 頭 長 崎 に 生 ま れ る 通 詞 長 崎 の 人、幕府時計師の店員、開設所 教授 幕臣の子、開設所教授、英国に留学
三 等 教 授	長 谷 部 甚 弥 湘 野 鋭 一 郎 新 藤 熊 之 丞 越 柴 之 助	漢 浦 野 鋭 一 郎 漢 新 藤 熊 男 英 杉 徳 次 郎 英 岩 佐 源 二 八 蘭 杉 山 三 八	漢 浦 野 鋭 一 郎 漢 新 藤 熊 男 英 杉 徳 次 郎 英 岩 佐 源 二 八 蘭 杉 山 三 八	鋭 翁 熊 之 丞 徳 八 郎 湯 浅 源 次	三 等 教 授 筆 頭 学 問 所 教 授 方 頭 取、微 典 館 学 頭 英国留學 英国留學
四 等 教 授	杉 徳 八 郎 井 湯 浅 源 次 井 沢 孝 之 助 三 浦 八 郎 左 衛 門	漢 芹 沢 三 浦 小 太 郎 漢 宮 崎 立 元 郎 漢 杉 浦 愛 蔵 漢 大 島 文 次 郎 漢 独 松 波 竹 次 郎 漢 小 田 切 銅 一 郎 英 田 村 初 太 郎 仏 神 原 操 小 出 一	漢 芹 沢 三 浦 小 太 郎 漢 宮 崎 立 元 郎 漢 杉 浦 愛 蔵 漢 大 島 文 次 郎 漢 独 松 波 竹 次 郎 漢 小 田 切 銅 一 郎 英 田 村 初 太 郎 仏 神 原 操 小 出 一	孝 之 助・潜 八 郎 左 衛 門 ( 升 次 郎 ) ?	四 等 教 授 の 筆 頭
五 等 教 授	小 田 切 銅 一 郎 富 山 讓 助 岡 田 主 税 布 施 金 弥	漢 富 山 讓 平 漢 岡 田 深 藏 英 秋 山 銈 三 郎 漢 長 六 三 郎 漢 安 間 寛 大 郎 英 孝 日 興 八 郎 漢 長 滝 庄 之 造 仏 織 田 勝 太 郎 漢 若 林 誠 三 郎 漢 山 崎 恒 一 郎 漢 土 岐 元 一 郎 漢 滝 川 清 三 郎 漢 古 賀 錦 吉 蘭 日 下 秀	漢 富 山 讓 平 漢 岡 田 深 藏 英 秋 山 銈 三 郎 漢 長 六 三 郎 漢 安 間 寛 大 郎 英 孝 日 興 八 郎 漢 長 滝 庄 之 造 仏 織 田 勝 太 郎 漢 若 林 誠 三 郎 漢 山 崎 恒 一 郎 漢 土 岐 元 一 郎 漢 滝 川 清 三 郎 漢 古 賀 錦 吉 蘭 日 下 秀	讓 助・讓・深井讓 主 税 ( 銈 三 郎 ) ? ( 寛 大 郎 ) ? ( 孝 日 興 八 郎 ) ? 銈 之 助 恒	学 問 所 教 授・微 典 館 学 頭 五 等 教 授 の 筆 頭
教授世話心得	若 林 誠 三 郎 山 崎 銈 之 助 新 見 史 雄 長 滝 庄 藏 星 野 鉄 太 郎 清水源次左衛門	漢 清 水 次 郎 太 郎 漢 岡 村 勇 吉 漢 吉 田 清 三 郎 漢 松 田 鉦 次 郎 仏 江 月 金 太 郎 仏 櫻 井 豊 次 郎 英 名 倉 納 漢 花 房 平 吉 漢 牧 野 駒 太 郎 英 目 賀 田 鍾 太 郎 英 渡 辺 春 太 郎 漢 仁 木 鍛 次 郎 漢 山 本 敏 三 郎 漢 寛 藤 次 郎 漢 海 老 原 太 郎 英 小 宮 山 勇 次 郎 仏 成 島 謙 吉 田 中 文 吉	漢 清 水 次 郎 太 郎 漢 岡 村 勇 吉 漢 吉 田 清 三 郎 漢 松 田 鉦 次 郎 仏 江 月 金 太 郎 仏 櫻 井 豊 次 郎 英 名 倉 納 漢 花 房 平 吉 漢 牧 野 駒 太 郎 英 目 賀 田 鍾 太 郎 英 渡 辺 春 太 郎 漢 仁 木 鍛 次 郎 漢 山 本 敏 三 郎 漢 寛 藤 次 郎 漢 海 老 原 太 郎 英 小 宮 山 勇 次 郎 仏 成 島 謙 吉 田 中 文 吉	源 次 左 衛 門 ( 鉦 次 郎 ) ?	

表2 「静岡学問所」職員一覧表

	一等教授	二等教授	三等教授	四等教授	五等教授	世話心得	合 計
漢 学	2	2	2	6	10	10	32
英 学		3	2	1	2	4	12
仏 学		2		2	2	4	10
蘭 学			1		1		2
独 学				1			1
(洋学集計)		(5)	(3)	(4)	(5)	(8)	(25)
合 計	2	7	5	10	15	18	57

表3 静岡藩内海外留学生一覧

自 費 之 分						県 費 之 分						公 費 之 分						出 帆	国 名	学 科	年 限	学 資	静岡県士族
明治辛未年十一月五日	同	同	同	同	同	同	明治辛未年三月	明治庚午年三月	同	明治庚午年三月	明治己未年三月	明治辛未年八月	同	同	同	慶応三年七月丁卯	米利堅	語学	五ヶ年	一ヶ年 千弗	安方粹 勝小 鹿		
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同		
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同		
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同		
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同		
川村 勇	氏祐長男 浅野 辰夫	小野 弥一	川村 清雄	大久保 三郎	竹村 謹吾	紀弟 糾四郎	弥五郎長男 名倉 納	東太郎弟 斎藤 金平	木村 熊二	大饒見 元一郎	深津 保太郎	目賀田 種太郎	富田 鉄之助	同	同人厄介 高木 三郎	同	同	同	同	同	同		

生を藩内からアメリカに派遣していること(「表3」参照)<sup>21)</sup>や、英学9名、西洋医学8名、仏学4名、独逸学と漢学各1名ずつの合計23名に及ぶ内地留学生を東京に送っているところにも、その意気込みがうかがえよう。

さらに続く特色は、洋学重視といいながらも、量的な比較という面からは職員数、生徒数ともに漢学系が強かったことである。

まず職員数では57名中32名で全体で占める割合は56.1%であり、生徒数についても、「旧静岡藩学校・生徒概数・静岡本校」として「漢学千二百人 皇学五十五人 洋学二百五十

人(内英百人、仏五十人、蘭二十人、独八十人) 数学六十人」<sup>22)</sup>とあるところからもわかるように、生徒数1,565名中1,200名ということで全体の76.6%を漢学系が占めているからである。

しかしながら徳川200有余年の伝統の重みをはねかえすように、静岡(徳川)藩の「府中(静岡)学問所」の洋学を中心とした教育をみると、伝統的なわが国の教育を継承しつつも西洋文明の成果をも果敢に吸収し、転封先の静岡の地で、新しい時代を切り拓いていく日本の文化発展の主役を演じていこうとしていた強い息吹きを感じ取ることができるのである。

## 2. 静岡藩立小学校の設立状況

明治初年の静岡(徳川)藩にあっては、まず府中(静岡)学問所が、続いて沼津の地には沼津兵学校及び同附属小学校が開設をみているが、明治3年(1870)7月にいたり「静岡藩内小学校建設ニ関スル布達」が出て、静岡藩内には幾つかの小学校が相次いで設立されている。

同年七月静岡沼津田中小島掛川浜松新居横須賀相良中泉へ小学校ヲ建設ス

此度静岡沼津其他各所エ小学校御取設相成候ニ付御藩中士族子弟厄介等ニ至ル迄入学致シ孰モ別紙掟書(略之)ノ通堅相守出精候様厚世話可被致候尤小学校頭取以下教授方人撰其外学事ノ事ハ都テ学校掛向山黄村河田熙西周取扱タルヘク候御入用筋ノ儀ハ其場所頭々右三人エ申談取調申立候様可被致候事

但士族家来農商ニ至迄有志ノ者ハ入学御差免相成候事

右各所ノ小学校へ小学校頭取一人同並一人教授一二人同並二三人ヲ置<sup>23)</sup>

すなわち、まず最初に明治「三庚午年九月十五日小学校ヲ本校構内エ仮設シ其後小学校建築落成ニ付同年十一月八日開校読書習字算術等ノ諸科ヲ設ケ日々教授尋テ各地諸所エ小学校ヲ開設シ夫々科目ヲ分教授」<sup>24)</sup>したが、「其後各所小学校ヲ勤番組ノ頭エ引渡静岡及清水湊ノミ是迄ノ通本校ニテ総理」<sup>25)</sup>している。

そして“職員概数”をみると、静岡学問所の「小学所頭取一人 小学所教授方十七人 教授方心得六人 教授方並三十一人 教授方並心得四人……○沼津兵学校小学所 頭取一人 頭取並一人 教授方三十五人○浜松小学所 頭取一人 頭取並一人 教授方十四人○掛川小学所 頭取一人 教授方十一人○横須賀小学所 頭取一人 教授方七人○新居小学所 頭取一人 教授方八人○田中小小学所 頭取一人 教授方十三人○相良小学所 頭取一人 教授方四人○小島小学所 頭取一人 教授方七人」<sup>26)</sup>で、“生徒概数”については静岡学問所の「小学校 漢学五百十人 洋学二百十人(内英六十人 仏五十人) 数学百五十人」<sup>27)</sup>であったが、他の「各所小学校生徒概数分ラス」<sup>28)</sup>といった状況であった。

さらに明治4年(1871)12月2日、府県学校すべてが「文部省管轄被仰付ニ付於元諸藩々費ヲ以テ取設候学校何ヶ所各科教官幾人及ヒ学校ニ引当候入費歳計幾許ト云コト急速書取ヲ以テ可差出旨同省ヨリ達ニ付同五年壬申二月五日差立ル調査」<sup>29)</sup>をみると、静岡藩の教育



の実情がさらに明確となる。

旧静岡藩以来設立有之候学校方法大概

一 静岡本校 静岡城内ニ取建有之候

国学漢学洋学<sup>英仏</sup>洋算ノ四科ニ分ケ教官ノ儀ハ士族ノ内<sup>独蘭</sup>ニ相撰學術ノ浅深ニ随ヒ一  
等<sup>五等迄</sup>其以下世話心得ノ名儀ヲ以等級ヲ立教授為致一ケ年両度程學課毎ニ修業  
人學術進方試業致シ其次第二寄励ノタメ聊宛ノ賞典取立申候右諸費モ一歳費用日当  
高金ノ内ニテ遣払其他学校懸并教官其外俗務役々月給等別紙ノ通ニ有之候

一 同所寄宿所 前同所

当県貫族ノ者学力吟味ノ上寄宿為致他県ノ人ハ願ニ寄自分人費ヲ以入寮相許諸入費  
等ハ元知事加禄ヲ以藩費不足ヲ補候金ノ内学校エ差出候ニ付右ノ内ニテ昨暮迄ハ取  
賄来候

一 同所小学所 前同所

漢学素読洋学洋算共幼年初学ノ者ヲ教授致シ教官等ノ儀右月給并修行人試業ノ儀モ  
都テ本校同様ノ振合ニ有之候

一 米国人教師日曜日土曜日ノ外日々小学所エ出張英語仏語理学化学四科ノ學課夫々教  
授為致候月給諸費別紙ノ通有之候

一 <sup>久能</sup>清水小学所

漢学教授致シ教官ノ儀ハ静岡本校ノ内<sup>右</sup>所エ為相詰諸費ノ儀ハ別紙ノ通有之候

一 集学所 静岡城外ニ取建有之候

漢学洋学劔砲術等壮年有志ノ者集学イタシ教官月給諸費ハ別紙ノ通有之候

一 沼津小学校 沼津城外

最初同所兵学校エ附属致居候ニ付漢学洋学洋算書学劔術体操水泳等ノ科有之修行人  
<sup>ハ</sup>束脩取立教官役々月給諸費別紙ノ通尤取立候束脩モ諸費ニ籠遣払申候

一 同所最寄小学所三ヶ所 一ヶ所ハ富士郡厚原村 一ヶ所ハ同郡万能原 一ヶ所ハ駿  
東郡東沢田村

学科教官ノ儀等前同断ノ振合ニテ月給諸費別紙金高ヲ以取賄右ノ外貫族ノ内沼津小  
学校并最寄小学校エ罷出修行致シ束脩難相納モノエ諸費ノ訳ヲ以渡来候分別紙ノ通  
ニ有之候

一 田中小学所 駿河国益頭郡田中元本多紀伊守居城二丸内

漢学洋学書学教官ノ儀凡静岡小学校ノ振合ニテ同所居住貫属ノ内<sup>ハ</sup>相撰教官ニ充教  
授為致月給諸費等別紙米金高ヲ以取賄来申候

一 小島初学所 小島村元滝脇丹後守陣屋跡

漢学洋学洋算書学教官ノ儀前同断月給諸費別紙ノ通米金高ノ内ヲ以取賄来申候

右ノ通ニテ静岡小学校ヲ初各所小学校等諸般進退都テ静岡本校ニテ総括致候儀ニ御座候  
壬申 二月

別紙

静岡学校一歳費用

- 一 金貳千両程 是ハ国学漢学洋学算術四学ノ費用凡積是迄遣払中ニテ定額無之ニ付本文金高凡ノ目当高二有之候
  - 一 金参千両程 是ハ集学所費用前同断凡ノ目当高二有之候
  - 一 金壹万四千五百九拾貳両程 是ハ学校集学所役々教授方等俸給一ケ年積
  - 一 米八拾四石程 金四百三拾九両貳分程 是ハ沼津小島田中久能清水万野等小学所費用凡一ケ年積尤沼津小学所丈ノ日用諸費ハ稽古人ノ差出候修業料ヲ以仕払相立来申候
  - 一 金貳千九百拾六両程 是ハ沼津田中小島万野等小学所教授方等俸給凡一ケ年積
  - 一 金九千両 是ハ元知事家禄ヲ以公廨費用不足ヲ補候金高ノ内学生修業入用トシテ学校エ差出置寄宿所入用東京其外留学生手当且賞誉筋等臨時費用ニ遣払候分
  - 一 金壹万両 是ハ米国人教師御雇伝習費用凡ノ目当高一ケ年積
  - 一 銀三千六百弗 是ハ米国人教師御雇給料一ケ月三百弗 米八拾四石程
  - 合 金四万九千九百拾七両貳分程 三千六百弗
- 右ノ外全臨時ノ費用并當繕ノ費ハ別段渡来申候<sup>30)</sup>

さらに「浜松県設置以前静岡藩ノ所轄ナリシ時」<sup>31)</sup>の遠江国を中心とした教育の状況についても、浜松県から同一時期に文部省へ上申された報告書により知ることができる。

浜松修業所

- 一 一歳費金三百両 一 教官合二拾五人 一 同俸金合二百五拾両
- 一 生徒 総計九百五拾三人  
現員五百九拾人

懸川修業所

- 一 一歳費金七百六拾九両 一 教官合拾人 一 同俸金合三百五拾両
- 一 生徒 総計三百五拾七人  
現員二百三拾人

横須賀修業所

- 一 一歳費金五百五拾壹両 一 教官合拾六人 一 同俸金合三百五拾両
- 一 生徒 総計三百五拾七人  
現員二百三拾人

新居修業所

- 一 一歳費金九拾九両一分 一 教官合拾二人 一 同俸金合三百七拾六両
- 一 生徒 総計三百二拾人  
現員二百三拾人

相良修業所

- 一 一歳費金五百八拾五両 一 教官合拾人 一 同俸金合四百四拾八両
- 一 生徒 総計四百八十人<sup>32)</sup>  
現員三百三拾人

表4 静岡県の沿革

伊豆  
駿河  
遠江

葦山代官(江川) — 葦山県 — 足柄県 (七・二・四)

沼津藩(水野)  
田中藩(本多)  
小島藩(滝脇)  
相良藩(田沼)  
横須賀藩(西尾)  
浜川藩(井上)  
掛川藩(太田)  
堀江藩(大沢)

上総菊間  
房絵の地  
移封

(八六)

静岡藩  
静岡一  
静岡県 (七・二・二四)

静岡県 (八六・八三)

伊豆国を編入

静岡県 (八六・二・二)

伊豆八丈島他  
六島を東京府へ分離

堀江県 (八六)

浜松県 (七・二・二〇)

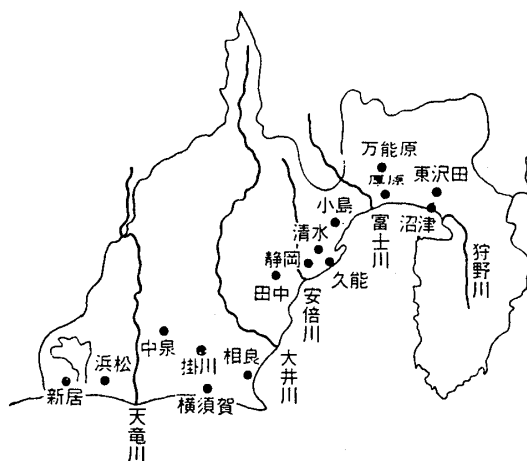


図1 静岡藩立小学校の設立状況

ここに示した静岡藩内に設立された藩立小学校は「表 4」<sup>33)</sup>にみる如く、藩内中の旧藩を中心にその周辺地区に重点的に設立されていたことがわかり、設置場所を図示すれば「図 1」のようになる。

つまり、静岡をはじめとして沼津・厚原・万能原・東沢田・小島・清水・久能・田中・相良・掛川・横須賀・中泉・浜松・新居の総計15校の藩立小学校の設立をみているのであるが、その後、静岡県湖西市にある『岡崎小学校史』（岡崎小学校所蔵）によって、同所にも藩立小学校に該当する教育機関が設立されていたことが橋尾四郎「明治初年の教育事情」により明らかにされている<sup>34)</sup>。

### III. 沼津兵学校の教育

## 1. 沼津兵学校の設立と選ばれた沼津の地

徳川家の転封に伴う旧幕臣たちの駿河・遠江・三河地方への移住者のうち、旧幕府陸軍局に属していたものの大半は沼津の地に移っている<sup>35)</sup>。そして沼津兵学校を設立する発端は慶応4年(1868)の「四月頃にして、其発起者は、阿部邦之助並に江原鑄三郎(後改素六)の二人なりとす、阿部は夙く旧幕府陸軍々人の為、一の学校を興さんことを計画し、教官と仰ぐべき人物選抜の事を、大築保太郎(後の陸軍大将大築尚志)に依頼し、其斡旋を以て、西周助(後改周)以下数人を得た」<sup>36)</sup>が、この間の経緯について、西周『西家譜略(自叙伝)』には次のように記されている。

表5 沼津兵学校教授陣

92

の諸科並に衛生經理の二部を分ち、乗馬学校を置き、附するに予備小学校と病院とを以て」<sup>41)</sup> 対処している。

ここにおいて沼津兵学校の「教授ニ任スル者ハ西周助頭取タリ赤松則良件鉄太郎塚本明毅大築尚志田辺太一ノ五名一等教授タリ其ノ余二等三等ノ教授タル者概ネ博学多識ノ秀士タル」<sup>42)</sup> 人材で固めたが、その教授陣容は「表5」にみる通りであった<sup>43)</sup>。

さらにいえば、西周が「沼津表へ着任候処、兵学校御取建相成候ニ付、即日ヨリ其調ニ取掛」<sup>44)</sup>り、準備成って明治2年(1869)「正月八日兵学校小学校とも御開相成」<sup>45)</sup>ったのである。

では何故、徳川家が兵学校を設立したのかといえば、その第1の理由は洋学を理解し、かつ西洋の数理の学をも備えた士官を多数養成して平素の「生活の保障をなし、有事の際には兵隊の士官として役立たしむる、所謂旧臣授産」<sup>46)</sup>のためであり、第2の理由は、黒船来航以来着実に洋式兵制の導入によって培ってきた人材の活用と、あわせ日本の将来を見据えた軍事面での要請に応える人材育成を目指したからである。

続いて、ではどうして沼津の地が徳川家兵学校設立の地に選ばれることになったのかという理由をみてみると、まず最初の理由は、徳川家自体が旧幕府陸軍解体という状況に直面していて、その後始末に苦慮していたが、旧幕府・陸軍局の多くの者が、江戸より近距離にある沼津の地に止宿していて、あたかも「沼津は陸軍関係者の着場所の如き觀を呈し」<sup>47)</sup> ていたことである。

続く理由は、江原素六の沼津兵学校に関連する次の回想記録により知ることができる。

余は(中略)兵学校をば静岡藩庁の所在地即ち静岡に置かんことを主張したり、然るに阿部氏は之に反し、此の如新事業を為さんとするには守旧派の障礙を慮らざるべからず、故に先づ御家老及び諸重役に充分の信用を得て学校創設教員聘用学課制定等に至るまで完全なる権利を得ざるべからず、必ず其権利を得らるべし、然へども之を静岡に設くる時は、縦令権利を得るも朝夕種々制肘は免かれざるべし、故に遠く距りたる所にて意の如くに断行するに若かずと、余大いに感服したるものなり、即ち地を沼津にトしたる阿部氏の卓見なり<sup>48)</sup>。

いうなれば藩内守旧派からの隔離と藩首脳への配慮、さらには明治維新政府に対する政治的な考慮もあって、藩庁所在地である静岡の地を避けることとしたというのが第2の理由であったのである。

さらに第3の理由を加えれば、当時の沼津は、「東は大岡村に接し、東南狩野川を隔てて楊原村に対し、南は駿河湾に面し、西は片浜村、北は金岡村に接す、東西十九町五十間、南北十九町二十間(中略)。本町は東南狩野川を帯び、南は一帶の千本松原を以て駿河湾に枕み、土地は平坦にして海陸の便備れり、戦国時代駿豆の咽喉地として此に築城し、今川北条武田三氏の衝を争ひし所、(中略)気候は四季海風を受けて、冬暖夏涼、寒暑共に浚ぎ易く、降雪を見ること稀なり」<sup>49)</sup> といった多面的にみた立地条件のすばらしさを挙げることでできよう。(「図2」参照)<sup>50)</sup>

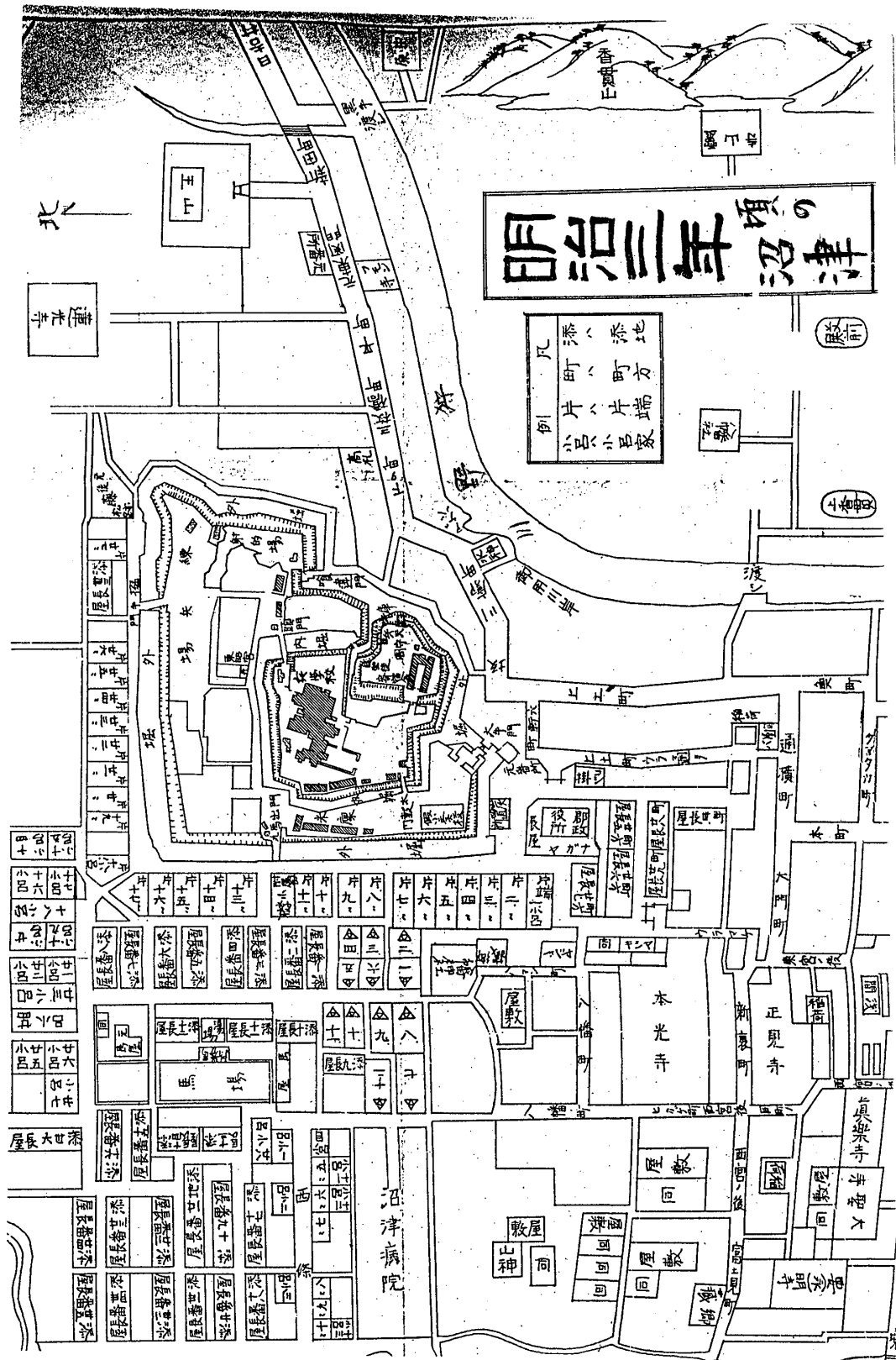


図2 明治3年頃の沼津 (『静岡県郷土研究・第9輯』昭和12.10)

## 2. 沼津兵学校の教育組織とその内容

明治元年（1868）12月に発表された「徳川家兵学校掟書」の序文に該当する“覚”には陸軍総括の名の下に、「此度於沼津表兵学校御取建ニ相成以来士官之面々悉入学修業被命諸科上達将校之器幹相備候上ニ而夫々之軍職ニ被任候 御趣意ニ候間各得其意志願有之面々ハ当兵学校御掟書之通堅相守修業可致候事」<sup>51)</sup>とあり、徳川家兵学校の開校を前にして、「旧沼津城ヲ以テ陸軍ノ所轄トナシ其ノ大半ヲ使用」<sup>52)</sup>することとし、書籍類については江戸から持ってきた「和漢洋ノ書大抵全備シ無慮二万卷ニ及ヒ生徒尽ク校書ヲ借用セ」<sup>53)</sup>しめることとしている。

さらに兵学校設立とその維持のための財政を賄うための予算については、「藩庁支給の経費以外に多額の機密費を」<sup>54)</sup>必要としたのであるが、これは阿部潜が「江戸城明渡の前数日、腹心の部下を率ゐて御金蔵に忍び入り、千両箱にて金十一万両を盗み出し、西丸下の撤兵屯所へ運び置きたり、（中略）此の十一万両ありしが為め」<sup>55)</sup>に、兵学校設置を容易なことにしたというエピソードもある。

以下、沼津兵学校の学校組織とその内容について考察していくことにする。

### (1) 教授方の事

沼津兵学校頭取の西周以下の教授陣はいずれも旧幕府の陸軍や海軍に奉じていた者や、昌平黉や開成所などに勤めていた者、あるいは海外留学で派遣され帰国してきた者など、意欲に燃え気力に溢れた人材で固められていた。

兵制をすべて西洋方式で再編成していくという当時の至上命令に依っていくためには、西洋の学問に裏打ちされた科学知識や諸技術を具備した人材が不可欠であったからである。

まず“頭取”についていえば、「兵事は勿論就中兵律ニ精通し和漢西洋古今之兵制ニ暁通し且人望」<sup>56)</sup>のある者としており、その撰任の手続きは「陸軍総括并諸局之軍議掛衆議之上其任ニ堪へき仁を撰挙いたし」<sup>57)</sup>て、藩主の徳川家達からの認証を得るといった次第となっていた。

なお頭取の「職掌」は「表6」<sup>58)</sup>にみるように10項目に及んでいる。

続く“一等教授方”の撰任については、「学校頭取主として陸軍総括并其掛軍議掛相謀り熟議之上二等教授方或は頭又は頭並之内或は他局より撰挙」<sup>59)</sup>して任命しており、その基

表6 頭取の「職掌」

- |    |  |
|----|--|
| 第一 | 沼津表之兵学校を預り候事                           |
| 第二 | 御領内兵学校附属之小学校を管轄致候事                     |
| 第三 | 兵学校小学校ニ而教授可致學術課目之立定改革を司候事              |
| 第四 | 第一等以下諸教授方并諸小学之教授方之撰任黜陟を司候事             |
| 第五 | 其他学校附員外諸司化学方画図方書籍方筆記方調馬方をも管轄致し候事       |
| 第六 | 諸生徒童生資学生本業生并員外生とも其身分支配之外仕置黜陟を司候事       |
| 第七 | 総而学校掛之吏役小遣迄其補撰出入并ニ出入商人とも是を司候事          |
| 第八 | 兵学校ニ係る諸教授方百司之給料度支其外諸雜費之出納は陸軍総括相談之上取扱候事 |
| 第九 | 兵学校ニ属せる文庫并器械馬匹とも其所轄之事                  |
| 第十 | 地方測量局も其所轄ニ有之候事                         |

礎資格は「将校三科目之内壹科ニ精く且可相成丈ケ数科ニ兼渡候者」<sup>60)</sup>とされている。

さらに“二等教授方”“三等教授方”“小学教授方”のそれぞれについては、「兵学校頭取一等教授方立会試業致候」<sup>61)</sup>うで決定していったが、求められた基礎資格は、「資学生授業之一科ニ精通し候者(中略)尤其科業之難易兼学之有無ニ応し第二第三之等級」<sup>62)</sup>が定められていった。

あわせ「諸教授方何れも學術の次第ニ長するに随ひ且生徒引立方深切ニ有之候得は小学教授方より資学生教授方ニ被挙資学生教授方之内ニ而も三等より二等江被挙候儀勿論之事」<sup>63)</sup>とされており、実力本位の昇格人事の道が開かれていた。しかも「二等三等之教授方自身修業致度志願有之候者は授業之余暇第一等教授方或は陸軍将校ニ就き修業いたし候儀相許候事」<sup>64)</sup>とあり、教師自らの研修の機会も与えられている点など、注目される。

また西周頭取は開校に臨んで各教授方らに「教授方詰所掲示」をば提示しており、沼津兵学校の教育を支える教師像を示すものとして見落すことができないものである。

#### 教授方詰所掲示

- 一 教師之任ニ膺る者は特ニ授業ニ於て諄々訓導いたし倦さるを主とするのみならず総而生徒の矜式する所なれば一動一作意を用ひ温厚恭肅を旨として生徒をして師を愛し業を樂ミ候様心掛性急暴怒之振舞押付ケ間敷所行絶而有之間敷事
- 一 教師等級順序ニ従ひ敬礼すへきは勿論同等之者も長幼序乱るへからす各専門之学科有之といへとも互ニ相助け偏執之念有之間敷事
- 一 授業之時刻は早く出晩く退き坐間戯言妄語を禁め書籍器械之乱雜を防ぎ総而執事吏番等之事忽略すへからさる事<sup>65)</sup>

#### (2) 生徒の事

沼津兵学校に入学するためには、以下に示す4項目の条件を備えていることが志願者に求められていた。

- 第一 其父と徳川家御家臣之列ニ相違無之候事
- 第二 年齢十四歳と十八歳ニ限り候事
- 第三 小学修業上達之上第一試無滞相済候事
- 第四 陸軍医師頭取と身体全健之請状を取り候事

但請状中自然痘又は種痘ニ而疱瘡相済候段書加可有之事<sup>66)</sup>

入学にいたる手順は、第一・第二・第四の項目が順次吟味され、その上で第三の項目が検討され、入学が決定される運びとなっていた。

したがって、この手順に従って、兵学校の設立に際しては、「初メ東京ヨリ移住セシ時三十歳以下ノ陸軍士官三百余名ヲ尽ク解職シテ生徒トナシ之ニ四書五經十八史略元明史略国史略ノ素読洋算開平開立マテ及ヒ作文ノ三科ヲ授ケ明治二年ノ冬ニ至ルマテニ其ノ業ノ成熟スル者ヲ試験セシコト前後四回<sup>内三回ハ臨時試験</sup>合格ノ者ヲ得ルコト九十六人尽ク資業生トナシ各月給四円ヲ与」<sup>67)</sup>えている。



しかして「生徒之義は資業生本業生之二等二分ち」、「資業生修業年限は四ヶ年」<sup>68)</sup>、「修業四ヶ年相立候得は第二試を受合格之者は免許状相渡本業生ニ転」<sup>69)</sup>じ、さらに本業生として「修業三ヶ年相立候得は第三試を受合格之者は得業生と相成」<sup>70)</sup>り、「其節学校頭取り免許状相渡し其支配ニ属候而陸軍士官欽員有之候得は年月之順次ニ応し撰入」<sup>71)</sup>していくこととしていたのである。

こうした諸規定をみると、府中（静岡）学問所にあつては士庶共学制を貫いていた点とは好対照となっていることがわかるが、のちになって「他藩より入学を希望する者続出したるを以て、例外を設け之等は一旦附属小学校に収容され、後撰抜されて兵学校に入り員外生の待遇を与えられ」<sup>72)</sup>ている。

なお、ここに“員外生”について言及するに、兵学校の「掟書」が制定された時点ですでに「将来軍人たるの意志なく専ら洋学数学等を志す者の為に設けられたる」<sup>73)</sup>もので、さきに記した入学資格としての4項目の条件を備えていなくとも「小学試業之外（中略）月々修業料として銀拾五匁差出し」<sup>74)</sup>さえすれば、「兵学校員外生之名義ニ而資業生と相成」<sup>75)</sup>ることができることとしていた。

したがって、この“員外生”という制度は沼津兵学校が旧幕臣の子弟に限定した将校養成の教育機関を中核としながらも、運営面では例外規定を準備して柔軟に生徒の受入れには対応していこうとする姿勢がうかがえるのである。

なお沼津兵学校には、生徒心得ともいふべき「授業所掲示」が生徒に提示されており、沼津兵学校教育の性格を知るのに重要である。

表7 資業生・履修科目表

操 練	銃 砲 打 方	乗 馬	図 画	器 械 学	数 学	英 内 科 語	書 史 講 論
生兵小隊並ニ大砲ハセキチー運転位マデ	銃ノ組立的打等打交セ			本源ノミ	フロゼクシヨノ学 実地測量 テル等ノ理並ニ用テ又此測器ナクシテ目ニ 遠近ヲ測リ図ニ写ス事又水平術ノ大略	点竄開平マデ 幾何開平式 二次方程式マデ 八線正斜三角 連数対数ノ理 立体	会話文典 万国地理概略 万国史大略 網鑑易知録

### 授業所揭示

軍中之要は法令を厳にして上下之分察るへからざるにあり生徒たる者は成業之上將校之任ニ当るべき者なれば受業之間も軍中之意を体し教師を將帥と仰き其命に違背することなく諸事物静ニして絶而無作法之儀有之間敷等級前後相定候上は其分を守り先輩を凌き後進を悔り候儀無之且平素といへとも其業を励精致すへきは勿論礼義廉恥を宗とし士道之大本相立己之美名を後世ニ遺し御家之光輝を四方ニ掲候様心掛專一之事<sup>76)</sup>

### (3) 教育課程の事

沼津兵学校の生徒が履修する諸教科は“資業生”と“本業生”の各々に区分され規定されている。

まず資業生には、「外国語学（英仏之内帋科） 窮理・天文・地理・歴史各大略 数学 書史講論 図画 調馬 試銃砲 操練」<sup>77)</sup>などの履修が求められている。（「表7」参照）

また本業生には「兼而自己之望ニ任せ願立之通」り、「歩兵將校之科」（「表8」）、「砲兵將校之科」（「表9」）、「築造將校之科」（「表10」）の3科中、1科を専門に選び、それを履修することとしていた<sup>78)</sup>。

だが沼津兵学校では「資業生学期四年ヲ終ルニ及ハスシテ陸軍省ニ帰セシヲ以テ本業生ニ登リシ者」<sup>79)</sup>は1人も出なかった。

しかも、そのことが資業生時代に身につけた幅広い教養教育の成果として、陸海軍に頭角をあらわした人物が生まれたのは当然として、政論家の島田三郎、小説家の塚原請、工学の石橋絢彦、経済学や歴史学の分野で貢献した田口卯吉、その他、学界や官界、実業界

表8 本業生 歩兵將校の科目 表9 本業生 砲兵將校の科目 表10 本業生 築造將校の科目

附 諸 種 小 銃 ノ 彈 丸 藥 包 ノ 製 造 并 ニ 其 利 害 得 失 モ 篤 ト 心 得 可 此 在 事	操 練	軍 律	砲 術	築 造	戰 法
	生兵ヨリ大隊マデ之業前			野 堡	歩陣用兵操諸規 練規則
			及諸種大砲 彈丸	其攻守大略	兵法
			彈射其用法得失 道ノ大略	城廓并大略	兵略

操 練	軍 律	化 学	器 械 学	築 造	戰 法	砲 術	数 学
			大概	野堡并其攻守	兵家諸規則	火工	高等幾何
				橋梁	兵法	各種大砲彈丸ノ製作并用法	微分
				城廓并其攻守	兵略	小銃并連輸諸具ノ製作理解并用法	静学 流体静学

軍 律	化 学	器 械 学	砲 術	戰 法	水 理 学	築 造 学	数 学
				兵家諸規則	道略	野堡地雷火	高等幾何
				兵法	橋水道	橋梁	微分
				兵略	家屋製造	永久城廓	静学 流体静学
					造船学	水雷火	伝信機略説

にと各方面にわたって人材を輩出せしめていくことになるのである<sup>80)</sup>。

なお、ここで特に注目される教育の特色として日本の数学教育をリードしていた点を指摘することができる。すなわち「就中洋算ニ至リテハ当時未甚開ケサリシニ独本校ハ赤松塚本二教授ノ薫陶ニヨリ生徒尤数学ニ長シ沼津ノ生徒トイヘハ拳世間ハスシテ数学ニ巧ナル者トナスニ至レリ」<sup>81)</sup>と。  
大ニ世ニ行ハル

あわせ兵法諸学関係をはじめ、多くの教科書も出版されており、教授陣による主体的な教材づくりの果敢さにも、その特色が認められるのである<sup>82)</sup>。

#### (4) 試業の事

沼津兵学校では「毎年十月朔日生徒入門被差許候」<sup>83)</sup> 故に、「十月ヲ以テ修業年限ノ始メト」<sup>84)</sup> していた。そこで学年末は「毎年八月中諸学科年之試業并二年々之試業」<sup>85)</sup> が実施されている。

ここでの試業の実施状況は、第1・第2・第3の試業に分かれ、第1は附属小学校から資業生への道を、第2は資業生から本業生への道を、さらに第3は本業生から“得業生”（兵学校での最終試験で、いわば卒業試験に該当するものであり、合格者には「得業生」という称号が与えられることになっていた）へと、それぞれ段階を経て実施されていく規定となっていた。そして、まず資業生になるための合格基準としては、次にみるような内容のものを身につけていることが必要であると指示されている。

甲 素読 句読音訓之間違なく氣息を調へ無遅滞朗誦いたし候を上級と致し候事

乙 手跡 右は吟味方望候公私文章速ニ出来文意貫徹いたし候を上級致候事手跡之善悪は文意の貫徹乙次ニ列し候得とも甲乙之優劣を撰候時は文意貫徹手跡見事之方上級ニ列候事

丙 算術 吟味方差出し候雜題間違なく且速ニ算当致し候事

丁 地理 小学ニ而学候内吟味方尋問致し候条無遅滞返答致し候を上級と致し候事<sup>86)</sup>

こうして「甲乙丙丁共相揃無滞試業相済候を甲科と致し」<sup>87)</sup>、「甲科之内優劣は十八史略国史略之内吟味方別段相望候処講釈いたし其手際を以て席順相定」<sup>88)</sup>め、「若又講釈ニ而も同様ニ候ハ、算術之内別題差出し候間其答之当否ニ因て席順」<sup>89)</sup>を決めていくこととしていた。

続く第2の試業においては、「一等教授方壱人教授改方壱人各科之教授方壱人ツ、陸軍總括差出し候吟味改役壱人列座」<sup>90)</sup>して、資業生として履修したすべての科目で合格することが要求されている。

さらに第3の試業においては、「兵学校頭取一等教授方壱人教授改方壱人各科之教授方壱人ツ、陸軍總括差出し候吟味改役壱人列座」<sup>91)</sup>して、本業生として学ぶ専門3科中の自己の専門課程中の各教科を逐一吟味される手筈になっていた。

なお第1・第2・第3の各段階での各試業とも、再試験の機会が与えられていたことも付記しておく。

#### (5) 休業の事

毎週日曜は諸学休日としていたが、その他に次にあげるものが休業日と定められている。

五節句（正月七日の<sup>じんじつ</sup>人日、三月三日の<sup>じょうし</sup>上巳、五月五日の<sup>たんご</sup>端午、七月七日の<sup>しちせき</sup>七夕、九月九日<sup>ちゅうりゅう</sup>の重陽）

八朔（八月朔日は徳川家康の江戸入城の日にあたる）

四月十七日（徳川家康の死去した日）

主上御誕生日（藩主・徳川家達の誕生日）

十二月二十一日より正月七日まで（冬期休業）

夏土用中（夏期休業）

七月十三日より十六日まで（盆会）

八月試業中（諸試業が集中的に実施されるため、諸試業実施期間中は当然授業がなかった）<sup>92)</sup>

### 3. 「徳川家沼津学校追加掟書」と沼津病院での軍医養成

「徳川家沼津学校追加掟書」（以下「追加掟書」と略す）の“覚”には「巳四月」とあって、追加掟書の制定が明治2年（1869）4月であることがわかる。そして追加掟書を制定した事情は“覚”中に明示されている。

此度当表学校ニ於而以来文学も相兼文武両道之學術教授致候様被命候ニ付右文学科目并ニ入学授業之手続等此度追加左之通掟書相定候間向後当支配より文官仕進之志願有之面には此掟書之条に堅く相守修業可被致候事<sup>93)</sup>

つまり追加掟書は、「徳川家兵学校掟書」が文字通り「兵学専攻であったのを文学を加えて『文武両道之學術教授』に改革するため文学関係の規定を補足したもの」<sup>94)</sup>で、31箇条にわたる諸規定は「一切本掟書（筆者注・「徳川家兵学校掟書」のこと）ニ準し変更無之義ニ付此追加掟書と本掟書と並ひ行れ候義と可心得候事」<sup>95)</sup>とあり、みな追加された規定であった。

また追加掟書でいう「文学之義は政律史道医科利用之四科」<sup>96)</sup>をいい、「文学四科之内政事は古今律令之利害を講究し治術之基を立る所なれハ総而政令を司る役には勿論収納運上公事訴訟等ニ係る人材を致教育候事」<sup>97)</sup>を目指さんとし、「史道は天下古今道理之本源を講究し教化之源を深うする所なれハ総而大小学之教授方は勿論使節掛合向等之人材をも此科ニて致教育」<sup>98)</sup>し、さらに「医科は人命之係はる所ニ而重き職分なれば尤教導文通を厳にし其器に当るものを撰挙教育し家伝秘方等之陋習を除き候事肝要ニ有之候事」<sup>99)</sup>としており、さらにまた「利用之科は富国之源を開き民生を厚うするの根本にして総而土木功器之製り水利礦山樹芸農耕等之事を司り候人材」<sup>100)</sup>を養成しようとした。

そして追加掟書による沼津兵学校の教育の改革の動きは「医科」に関して特に具体化が顕著である。

すなわち藩内では明治2年（1869）2月21日より、府中「四足御門外仮病院御開相成」<sup>101)</sup>

りしに、病院頭からの布達書には「今般医学修業病者救助ノ為メ（中略）病院御取建ニ相成（中略）御開相成候ニ付テハ町方在方ノ者ニ至ル迄有志ノ者ハ其所奉行エ申出奉行所添翰ヲ以致入門学術研究可致事」<sup>102)</sup>とあって、臨床医養成が「駿府病院」設立当初から意図されていたことがわかり、「引続ヒテ沼津（中略）へ仮病院ヲ設立」<sup>103)</sup>しているところから、追加掟書が制定される時点の直前に静岡藩が経営する病院がすでに沼津に設立されていたことがわかる。

さらに「此時ニ方ツテヤ有名ノ大医林紀坪井信良戸塚文海等静岡ノ病院ニアリ杉田玄端林海仙三浦文卿等沼津ノ病院ニアリ多数ノ俸禄ヲ受ケ不尠ノ費用ヲ糜シ以テ疾病ヲ救護シ以テ後進ヲ誘導スルガ故ニ其利益モ亦僅少ナラス診察ヲ乞フ者門外市ヲ為スニ至」<sup>104)</sup>っていたということからも、追加掟書での「医科」に関する規定がかなり具体化の動きをみている傍証となる。

こうして明治2年に沼津病院は「新設されしか、名は病院なりと雖も同じく兵学校の附属にして、事実ニ於ける陸軍々医養成所たりしなり。病院頭取は杉田玄端にして、御用重立取扱は林海仙なりき。林は後洞海と改名す。榎本、赤松等と共に和蘭に留学したる林研海（改名して紀と云ふ）の父なり。研海の弟西周男の養嗣となる、紳六郎はれなり。病院にては診察料を徴せず、僅少の薬価を収むるのみにて、経費はすべて藩庁より支出したり」<sup>105)</sup>と『江原素六先生伝』中には記されている。

そのことを裏付ける資料として、このたび沼津市立図書館郷土資料室で「徳川家陸軍医学所規則」（複写資料）を見つけたが、その冒頭には「此度陸軍医局御取建相成候就いて医学修業も同所ニおゐて御差許」<sup>106)</sup>すということと有志の者は毎月3日、朝8時より12時まで、同所に正装で出席する事とされている。

なお志願する者は「御家中并領内之者ニ而七八才より十八才迄之者」<sup>107)</sup>とされ、入門時に

表11 醫學童生科表

講義聴聞	水練	體操	地理	算術	學書	素讀	
小学論五循環				加減	数字	三字經孝經	一級
				数学度量權衡	伊呂波片假名	大學中庸	二級
			地理	雜題	往來物	論孟五經	三級
				除比例	公用文章	十安略國書	
				雜題	分数開平開立	元明史略	

表12 醫學資業生學科表

乘馬	圖畫	數學	英佛語の 内一科	書史講論
		算點	會話 文典	博物新編 全體新論 孫子
		開平開立		皇朝史略 日本外史
		二次方程式	萬國地理 概略	網鑑易知錄
			萬國史 大畧	

表13

日課	
日曜日	朝九時より十二時
月曜日	午後一時より四時
火曜日	同
水曜日	同
木曜日	同
金曜日	同
土曜日	同
人身窮乏講義	會後
完治者	會後
解剖者	會後
繡帶例	終り
内科者	會後
外科者	會後
舎密者	會後

は金百疋を納める事、また入所を許された者は「稽古始之外平日略服之事」<sup>108)</sup>とあり、「医学童生学科表」(「表11」<sup>109)</sup>)及び「医学資業生学科表」(「表12」<sup>110)</sup>)の2表が添えられており、さらに「原書稽古ハ午後一字より二字迄翻訳書ハ三字と四字迄之事」<sup>111)</sup>といった受講上の諸留意点も提示されている。

さらに「表13」<sup>112)</sup>にみるような「日課」も示されており、日付けは明治3年2月となっている<sup>113)</sup>。(「表11～13」は原史料の復刻)

その後の沼津病院については、明治「四年辛未ニ至ツテ病院益熾ナリ本院ハ云ニ及ハス沼津病院(中略)ニモ寄宿舍ヲ設ケテ病者ヲ看護シ功ヲ奏スル者頗ル衆シ 抑徳川氏ノ静岡ニ封セラル、ヤ創痍残歛百般ノ事務概ネ見ル可キ者無シ但沼津ノ兵学校ト静岡ノ漢洋学校及ヒ病院ハ僅カニ超過セリ」<sup>114)</sup>との評価もなされていた。

だが明治「五年八月創メテ学制頒布ニ付公立ノ学校病院尽ク廃止シ其医師教師尽ク免職」<sup>115)</sup>にしたところから、静岡藩経営の静岡・沼津の両病院のスタッフであった「紀信良文海玄端ノ如キ或ハ諸省ヘ登庸セラレ或ハ都下ニ寄留シテサシモ盛ンナリシ両病院」<sup>116)</sup>も衰微する運命を余儀なくされていたのである。

#### 4. 沼津兵学校の辿った道

沼津兵学校の辿った道は、「明治元年戊辰役の発端より、明治五年二月兵部省を廃して、陸海軍二省に分割する前まで」<sup>117)</sup>の、いわゆる「皇軍草創時代」と深い関連があった。

その間、学校の名称については「兵学校掟書」が撰定された時点で「徳川家兵学校」と称していたが、明治2年(1869)8月の静岡藩制の改革の際、所在地名を冠するところとなり、「沼津兵学校」と改称された。しかしながら明治3年(1870)に入ってから、“兵学

校”の名が明治維新政府を刺激することを懸念して、藩当局では「静岡学校」に対する「沼津学校」と呼称しているが、一般には、すべて「沼津兵学校」の校名で広く知られていた。

ところで明治維新政府では“戊辰の役”で諸藩兵を徴した関係から、種々の“軍規軍令”を下しており、その実績を踏まえ「公議を以て皇軍を建設せんことを図る」<sup>118)</sup>ているが、当時の世論の動向は、「陸軍は諸藩に於てこれを整備し、海軍のみを朝廷に於て建設せんことを要望し」<sup>119)</sup>ていた。

だが軍務官判事として戊辰の役で諸藩世襲の藩兵を指揮した大村益次郎は、彼等が「いかに大部隊を以てする近代戦闘に不可なるを痛感し」<sup>120)</sup>、ついに大村は「廃藩置県の議を唱へ、国軍編成の必要を唱導し、士族の常識を解き、その佩力を禁じ、徴兵令を布いて国民皆兵となし、一般国民の中から身心共に健全なる者を選んで皇軍を組織すべ」<sup>121)</sup>きであるとして、「諸道現兵の内、年齢二十五より三十五までの間、軀幹強壯自ら兵たらん事を好む者を挙げ、親兵を為す」<sup>122)</sup>という“親兵組織”の建議を試みている。

さらに大村は自らの権限を行使して慶応4年(1868)8月2日、京都に「兵学校」を創設させ翌年正月「兵学所」と改称。さらに同年9月に大阪に移して「兵学寮」と改称せしめている。また同年9月、旧幕府が設立した横浜語学所を引継いで、明治維新政府が陸軍将校に正則教育を施す教場とする目的で、大村の意見に従い「陸軍将校正則養成所」へと発展させている<sup>123)</sup>。

こうした軍事関係の実績が、大村をして明治2年(1869)7月8日、兵部大輔に任ぜしめ、兵部の実権を手にした大村は、本格的な軍制改革を着手していくことになる。

大村の考えは陸軍については「仏式を以、一般の式相立候見込」<sup>124)</sup>みということで、全国諸藩では薩摩が英国式、紀州が独逸式、その他の大半の諸藩が和蘭式といった状況であったところから、仏蘭西式を採用して陸軍将校の養成をすすめていた沼津兵学校の教育には、兵部省はいたく関心を寄せた。

こうして「時の陸軍卿特に沼津に来て視察」<sup>125)</sup>しており、その後、大村の遭難で兵制改革の速度は弱まったが、やがて兵部省による沼津兵学校への触手は、着実に延びていくことになる。

その第1弾は明治2年の内に三等教授方・揖斐吉之助の兵部省出仕への徵命であり、翌3年(1870)春には一等教授方・赤松大三郎(則良)、さらに同年9月には頭取・西周にも兵部省出仕が嚴命されている。

ちなみに西の場合を『西周伝』中の明治3年9月20日の頃でみると、次のように記録されている。

弁官書を静岡藩知事家達に馳せて曰く。其藩士西周助、津田真一郎儀御用有之候間、至急上京可被申付候也と。二十一日藩命を受けて沼津を発す。(中略)二十四日東京に至る。(中略)二十八日兵部出仕少丞准席を命ぜられ、学制取調御用掛を兼ね。家達の命令に曰く。今度依召東京へ罷越候儀大儀に候。入念相勤可申者也と。二十九日始めて兵部省に至る<sup>126)</sup>。

ところが明治政府・兵部省管轄下の沼津兵学校からの人材吸収は、教師からさらに資業生にまで及んでいく。

まず明治3年閏10月20日、「諸藩ヲシテ陸軍生徒ヲ大阪兵学校ニ進致セシ」（「太政官布告・法令番号756」）<sup>127)</sup>めており、沼津兵学校からは5名の資業生が大阪に派遣されている<sup>128)</sup>。

さらに翌4年（1871）4月14日には「教導隊生徒撰方規則ヲ定メ生徒ヲ進致セシ」（「兵部省達・法令番号23」）<sup>129)</sup>むべきことを要請してきたことで、沼津兵学校からは教導隊生徒として20名の資業生が派遣されている<sup>130)</sup>。

こうした動きを受け、「既ニシテ西赤松田辺ノ三名各官ノ徵命ニ応シ冢本明毅頭取ニ任シ大築尚志頭取並」<sup>131)</sup>に任命して沼津兵学校の教授陣建て直しが図られている。

たまたま明治4年の夏に、3人の英国人が沼津の地を訪れ、彼等の旅行記が横浜で発行されている英字新聞『ザ・ファー・イースト』（“The Far East,” Vol. II, No. XIII, Dec. 1, 1871）に掲載されているが、5日目が沼津兵学校参観の記録となっており、当時の沼津兵学校の教育の一端を知ることのできる貴重な証言となっている<sup>132)</sup>。

## 第五日

嵐で、風の強い晩であったが、朝方には晴れ上がったので、私たちは多くの護衛をつれて沼津の町の見物に出かけた。まず私たちは数軒の見せ棚に行き、物価が横浜に比べてたいへん異なっているのに注意した。それからさらに学校に行き、授業中の教室を見た。最初の教室では、人々が大きな黒板を前にして着席し、英文法を学んでいた。つぎの教室ではゴールドスミスの古代ローマ史の授業中で、百二十人の生徒がおのおの自分の番がくると声を出して本を読んだ。そのあとで私たちは主な教授に引きあわされた。彼らは私たちの入っていくとき、“How do you do?”といい、立ち去るときには、“Good bye.”といい、その英語はたいへんいい発音だったが、しかし、この二つのあいさつが、彼らの英語で言おうとしたすべてであった。痛んだヨーロッパ風の藤椅子をすすめられたが、私たちには、いつこわれるかも知れない椅子に坐る危険を冒すよりは、床に坐る方がよほど安楽であった。この学校は古い城の中にあり、ある大名の紋所が今なおどの教室の壁にも飾ってある。城の周囲には塁壁がたくさんあり、ひとつの壕をめぐるしてあるが、あらゆるものは整然と維持されている。町から城への入口の門構えはたいへん丈夫な石造物であるが、門はどれも木造でしかもたいへんずっしりとした厚みがあり、木材はいずれも鉄棒で強く締め合わせてある。城から出て私たちは病院の方へ歩を進めた。

ところで沼津兵学校は、明治4年9月晦日の“達”によって「以来兵部省管轄たるべき旨仰出」<sup>133)</sup>され、さらに同年12月16日の“布達”によって「当兵学校の儀以来沼津出張兵学寮と相唱」<sup>134)</sup>えることとなり（傍点・筆者）、従来の“教授方”はみなそれぞれ“官名”を帯びることとなった。その主なる者は次の通りとなる。

任陸軍少丞兼兵学大教授　　塚本明毅



同陸軍中佐兼兵学助	大築尚志
同陸軍少佐兼兵学権助	浅井道博 <sup>135)</sup>

あわせ、それまでの2等・3等の各教授方も、大尉・中尉などに任命され、かつ相次ぎ上京出仕が命ぜられている<sup>136)</sup>。

そして明治5年(1872)2月28日をもって兵部省が陸軍・海軍の2省に分離・独立した後の同年5月3日、陸軍省は「沼津学校ヲ引払ハシ」(陸軍省・法令番号84)<sup>137)</sup>め、そのすべては、当時すでに大阪から東京・和田倉門外に移っていた陸軍兵学寮に吸収されることになった<sup>138)</sup>。

こうして同年5月11日、当時の沼津兵学校資業生の筆頭格であった古川郁郎(陸軍大尉勤務)・成瀬甚平(陸軍中尉勤務)・大川千作(陸軍少尉勤務)・江間精一(陸軍曹長勤務)らは、兵学校生徒(資業生)63名の指揮に当たり、隊伍を組んで沼津の地を離れ、東京に向かっている。

沼津兵学校、すなわち沼津兵学寮の教師をはじめとする関係者も資業生の沼津出発と時を同じくして上京していく<sup>139)</sup>。

さらに学校備品の「附属の書籍器械等頗る多く、小さき蔵の一つ二つには入切れぬ程沢山にあり、此外ラッセル、山砲、小銃、日本全国の絵図等も少からず有ったが、是等は大部分廃校と同時に陸軍に引継<sup>140)</sup>がれ、ここに名実ともに沼津兵学校は消滅をみることになるのである。

#### IV. 沼津兵学校附属小学校の教育

##### 1. 代戯館と沼津兵学校附属小学校の設立

旧幕臣の多くが沼津の地に移住してきて最初に直面した問題は住居の確保と子弟教育という2つがあった。

まず前者の問題については、真野文二(元九州帝国大学総長・工学博士)の沼津移住当時の回想により、その状況を知ることができる。

私の御当地に参りましたのは明治元年で私は八歳の時であります。私の古い記憶を呼び起しますと、私共は品川より舳舟で沖へ出て、黒船に乗換え清水港に上陸しました。此の黒船と云ふのは多分賃借した米国汽船で美屋古丸と命名したものと思はれます。私は清水より祖母と一緒に駕籠に乘せられて沼津に着きました。処が沼津は一時に多数の旧幕臣が殺倒したものでありますから、今日で云ふ超満員で、宿屋も下宿も、又空間もありません。住む家さへありません。そこで私方では可なり離れた金岡村西沢田の後藤寿作氏の隠宅を借受け仮寓致しました。是より父は日々沼津へ通ったのであります。けれども不便でありますので、間もなく五東松に茅屋を新築致しまして引移りました<sup>141)</sup>。

続く子弟教育の問題に関しても、旧幕臣たちの手によって早々に取り組まれており明治

元年（1868）11月には「沼津城内ノ旧長屋ヲ以テ仮校トナシ」<sup>142)</sup>、初等教育段階ながらも、「素読」「手習」「算術」の3科をもって教育を開始している。そして、その教場を「代戯館」と名付けており、それは「読んで字の如く遊戯に代へるの意であ」<sup>143)</sup>った。時に教師は亀里樗翁・築山正三郎ほか数名で、生徒は50名から60名ほどであった<sup>144)</sup>。

また教場はその後「片端三百十四番三百十五番に適当な家を見出し之に移った」<sup>145)</sup>が、「雨戸に墨を塗って黑板となし、蓆を敷いて座席を作」<sup>146)</sup>って教育活動の場としている。

ところで、沼津兵学校附属小学校を設立することとした直接の動機は、沼津「兵学校卒業生、予備ニ供シ併テ広ク少年ノ就学ヲ目的ト」<sup>147)</sup>したところにあった。

そこで、すでに設立されていた代戯館をもって「之に充用することとし、名称を徳川家兵学校附属小学校と改め、（中略）板葺の邸宅一棟を改造して仮校舎に充て」<sup>148)</sup>て明治2年（1869）1月8日に開校し、1月13日から授業を開始している<sup>149)</sup>。

ただ同附属小学校は沼津兵学校の学制上は予備門的な機関の必要性から設立されたものであっただけに、「当時に於て新規なりし小学校の、称呼は同じやらでも今日の其とは全く意義を異にし、程度も現在の中学以上の実力」<sup>150)</sup>までも養成することが期待されており、「範を欧米大学予科の組織にとり之を斟酌し」<sup>151)</sup>、実情に合致させて設立したもので、それ故に「此の兵学校附属の小学校は其予備門として同校頭取管轄の下に置かれ、初め蓮池新十郎之が頭取」<sup>152)</sup>に任命されている。

なお「徳川家兵学校附属小学校掟書」については、兵学校頭取の西周が「オランダ留学の仲間で、招かれて一等教授となった当時遠州見附に隠棲中の赤松大三郎に立案起草を委嘱し」<sup>153)</sup>て、西の撰定になる「徳川家兵学校掟書」とほぼ同一時点に出来上がっている。

## 2. 沼津兵学校附属小学校の教育組織とその内容

明治元年（1868）辰12月5日の“廻状”には、「来る八日より小学校御開相成候に付有志の向は入門修業可有之、年齢は制限なし、学業は幼年の者と同様に授くる事、但謝金は貳朱つつ納る事」<sup>154)</sup>とあり、同年12月8日から“童生”の募集を開始し、学校の経費すべては「陸軍惣費額中ヨリ支弁」<sup>155)</sup>することとしていた。

だが附属小学校で管理する書籍自体は当初はまだまだ「日用授業書ノ外ハ十数部ニ過キ」<sup>156)</sup>ぬ状況であった。

以下、沼津兵学校附属小学校の教育組織とその内容について考察をすすめる。

### (1) 教授方の事

沼津「兵学校附属小学校之儀は兵学校頭取之管轄ニ而学業之定課教授方之撰任は兵学校頭取之取捨ニ有之候得とも其外総而校内之諸事は小学校頭取之任」<sup>157)</sup>とされている。

そこで、西周「兵学校頭取も小学校教授方之内ニ而器幹有之候者を壱人相撰小学校頭取を申付」<sup>158)</sup>けることとしていたが、「相当之人無之」<sup>159)</sup>きたため、「兵学校教授方之内より」<sup>160)</sup>、蓮池新十郎が撰任されている。

ここにおいて沼津兵学校附属小学校の教授陣は「表14」<sup>161)</sup>にみるように決定した。

### (2) 童生の事

沼津兵学校附属小学校では、開校当初から「陸軍支配は勿論其外最寄移住御家臣之向并

表14 沼津兵学校附属小学校役々

湯呑所詰	小学校附	教授方手傳	体	剣	素	手跡教授方	同	同	三等教授方	頭
			操	術	読		手伝	並		取
(氏名略す)	亀里鎮四郎	柳田真八郎	岡島小太郎	芥谷忠三郎	福島邦太郎	別所貫一	伊藤藤銘一	小野田東市郎	野口昇次郎	関大次郎
										竹村保三郎
										石川東崖
										龜里榎翁
										脇屋辰太郎
										山田榮三
										岡田隆三
										生駒藤之次
										名和謙次
										永井源内
										尾江川清
										斎藤三郎
										鈴木五郎
										榎本徳治郎
										森川大三郎
										蓮池新十郎

〔備考〕

兵学校三等教授方兼任のち専任

(重申) 兵学校三等教授方兼任

(長裕) 兵学校三等教授方並兼任のちに頭取となる

(知三)

後に頭取並となる

後に万野原学校所頭取となる

(香峰)

元代戲館教師

元代戲館教師

兵学校第四期(明治二・九合格)資業生

ニ最寄在方町方有志之者は通稽古御免相成候事」<sup>162)</sup>とあって、広く“士庶共学制”を導入しており、「童児七八歳ニ而(中略)入門相願童生ニ相成」<sup>163)</sup>ることができたのである。

ただし「童生と相成候者は入門之節師匠一統江入門金百疋持参且其後之處は其父兄後見人又は母親も月々修業料金貳朱ツ、相納可申事」<sup>164)</sup>となっていたが、修業料の負担については、「陸軍兵士之倅三男厄介并ニ当時之處無禄移住之御目見以下之倅次三男厄介は入門金貳朱其外盆暮壹朱ツ、相納」<sup>165)</sup>めさえすればよいといった旧幕臣子弟への配慮も一つの特色で、庶民サイドには負担の軽減措置が講じられていない点で、士庶共学制のもつ限界が認められる。

### (3) 教育課程の事

沼津兵学校附属小学校における童生の修業年限については、「年期無之事尤兵学校資業生入相願候者は拾八歳限り之事」<sup>166)</sup>とされているが、童生は「年長ノ者ハ幾歳ニテモ拘ハラサルヲ以テ三四十歳ニテ就学セシモノモ又勘カラス」<sup>167)</sup>いた。

また童生の学ぶ「小学之課程」(「表15」<sup>168)</sup>参照)は、「素読・手習・算術・地理・体操・剣術・乗馬・水練・講釈聴聞」<sup>169)</sup>とされ、この中に「素読手習算術之三課は若其父兄自宅にて授業致度旨相願」<sup>170)</sup>う時は、これは許可されていた。

さらに諸学科は、童生の「階級ヲ三段ニ分ケ其ノ熟スルヲ待チ試験シテ級ヲ進ム」<sup>170)</sup>こととしており、各等級ごとに配列した学科のたて方や内容の配列構成には、近代学校における教育課程編成の方式が採用されている。

特に「算術」に関しては、沼津兵学校の数学教育が「当時の日本最高の水準をゆくもの

表15 童生の学科と教科用書一覧

水	撃	体	作	習	修	英	算	素	
泳	剣	操	文	字	身	語	術	読	
夏季ノミ			公私用文ヲ授ク		日曜日毎ニ教師口授ス		加減乗除 分数小 諸等	大統字 歌經四 孝書經	一級
							諸比 例	五級	二級
						単語 會話	級数 開方	元明八史略 國史略	三級

であった」<sup>171)</sup>と評価されていただけに、それにふさわしい基礎を重視した発展的な教育体系を備えたものであった。

また授業時間の配当については、「八時ヨリ三時迄トス其ノ内素読二時間算術一時間余ハ習字作文ノ時間ニ充テ而テ体操撃剣ハ三時ヨリ四時マテ隔日ニ授クルモノト」<sup>172)</sup>している。そして「素読ノ熟セシ者ニハ并セテ十八史略国史略ノ講義ヲ授ケ英語ハ三級以上本科ノ熟スル者ニ限りテ数ヘ而テ年長ニシテ習字ノ熟スル者ニハ爾余ノ科ノミヲ授業」<sup>173)</sup>している。

さらに進級の要件については、「其ノ熟スルヲ待ッテ以テ一定ノ学期ナシトイヘトモ同力ノモノヲ一類トナシテ授業スルコトスヘテ兵学校教授法ニ同」<sup>174)</sup>じで、試験は「春秋ノ定期及ヒ月次ノ二箇ニ分ツ但三級ノモノ試験ヲ受ケ資業生ニ登第スルコトハ兵学校掟書ニ」<sup>175)</sup>ある通りであるとしている。

ついで童生の操行については、童生の中で「若怠惰乱暴之所業又は師命を奉せざる事有之候節は棒満黙坐逗校禁足等之罰不可逃事」<sup>176)</sup>と規定しており、その責めは童生のみならず父兄にもあるとして「願短冊差出候者精々折檻等相加候儀勿論之事」<sup>177)</sup>であるとしている。

なお童生で、「教授方依怙臆負之沙汰」<sup>178)</sup>があつて「不服之儀有之候節は願名目之人得て聞糺愈たしかなる証拠有之候時は兵学校頭取ニ可訴出候事」<sup>179)</sup>としている点も、ここに付記しておく。

#### (4) 学校経営の事

沼津兵学校附属小学校の所轄は兵学校頭取に属し、「学業之定課教授方之撰任」も兵学校頭取の権限下にあることはすでに考察したが、附属小学校内の「月々之試業三級之進退童生之褒貶罰金等は悉く小学校頭取之差図」<sup>180)</sup>によるのは当然として、「其外諸学術之教授方総而小学校頭取之差図を受銘々受持之学課を教授」<sup>181)</sup>することとされている。

あわせ諸科の教授方は「同心協力総而偏執之念なく授業致候は勿論童生之進方成丈ケー科ニ偏勝不致候様心掛」<sup>182)</sup>けるばかりでなく、学力の劣る者がいれば、その点も配慮して、「授業ハなるたけ平等に行届候様精々可申合候事」<sup>183)</sup>とするなど、教師相互に教育活動に取り組む事前・事後の意志の統一や協力体制など、童生に対する個別指導の徹底といった、今日からみても積極的に評価できる諸点があった。

なお“休業日”については「兵学校ニ同シ」<sup>184)</sup>とされている。

### 3. 「静岡藩小学校掟書」の制定と静岡藩小学校

明治2年(1869)7月、明治維新政府は“知事の職掌”を「知藩内の社祠戸口名籍字養士民布教を掌り、風俗を化敦し、租税を収め、賦役を督し、賞刑を判し、僧尼名籍を知り、兼て藩兵を管す」<sup>185)</sup>ることと定めた。そして旧来の家老・中老・留守居といった職名を悉く廃し、大参事・権大参事・少参事・権少参事を置くことを命じたことで、これを機に静岡藩では藩政の改革をすすめ<sup>186)</sup>、その改革の一つとして教育事業の面でも「兵学校附属小学校掟書」を下敷きにして改正を加えた「静岡藩小学校掟書」が明治3年(1870)午正月に制定されている<sup>187)</sup>。(以下「新掟書」と略す)

この「新掟書」に関連して、静岡藩では明治3年7月を期して、藩内に藩立小学校の設立を計画し、その具体化された時点で、藩内すべての藩立小学校に「新掟書」が共通して適用されるものとした<sup>188)</sup>。そして藩立の「小学校頭取以下教授方人撰其外学事都而学校掛向山黄村河田熙西周取扱タルへ」<sup>189)</sup>きこととされ、ここにおいて静岡藩は単線型の初等教育制度の確立を目指していく。

ところで「新掟書」が制定され最初に適用されたのは沼津兵学校附属小学校においてであった<sup>190)</sup>。また静岡学問所内で初等教育を担当していた「幼年組」では学制的に不明確な存在であったところから<sup>191)</sup>、暫定的に沼津兵学校附属小学校に準じ「新掟書」中の部分的適用ですませていた。それが明治3年11月8日に「幼年組」が昇格して「静岡藩小学校」として再出発したのを皮切りとして、静岡藩内「各地諸所エ小学校ヲ開設」<sup>192)</sup>し、藩内全域に「新掟書」に基づく初等教育機関が相次ぎ誕生していったのである。

さて、ここで「新掟書」をさきの兵学校附属小学校の「旧掟書」と比較してみると、「童生」という表記はすべて「小学生」という名称に改められており<sup>193)</sup>、また「小学校稽古人 修業料并謝礼之儀 (中略) 入門之節束脩金百疋 毎月修業料金壹朱ツ 盆暮教師一統へ 謝礼金百疋ツ」<sup>194)</sup>(傍点・筆者)と傍点部分が改正されており、さらに重要な改正点は「貧窮に付子弟厄介のため修業料其外難相納もの士族は頭支配農商は支配地方役江可願出候ハ、其頭支配より小学校頭取江書付を以て相断役所金之内より其者江修業料納方相弁候事」<sup>195)</sup>としていることで、旧幕臣の関係者のみの修学上のそれまでの優遇措置を否定して

表16 静岡藩小学校課業表

講 積 聴 聞	水 練	体 操	地 理	算 術	手 習	読 書	
		剣術		加減乗除 数字	国名 尽 数字 往来 物頭	歌三 題字 孝経 経大 四書 逸統	初 級
			皇 國 地 理	諸 分 数 等 加 減 乗 除	公 私 用 文 章	五 経	一 級
				比 例 式 全 部	私 設 題 用 文 章	元 明 史 略	二 級
				算 盤 用 法	開 平 ・ 開 立	英・ 三 史 略 大 意 講 解	三 級

一般農商民子弟にも対等の優遇措置を講じており、“士庶共学制”が名実ともに実効性をもつところとなる。

続く学年段階についても、それまでの「一級・二級・三級」という3段階から、「初級・一級・二級・三級」という4段階へと切り換えられ、課業表の内容もよりきめ細かなものとなっている。（「表16」<sup>196)</sup>参照）

すなわち、従来の「素読」が「読書」と改称され、第3級には『三史略大意講解』と『英・仏語学初歩』が用意され、さらに「第三級之小学生進方宜しく課業表中に載候課程よりも分外に抄取候者ハ其望に任せ論孟之輪講左伝蒙求等之会読英仏語学は会話之類まで算術ハ級数対数表之用法等教授致し可遣事」<sup>197)</sup>とて、小学生の個々の学習能力に応じて、より高度の学習教材が順次用意されている事なども「新掟書」における著しい改正点である。

あわせ「算術」の第3級には庶民の生活に欠かせぬ「算盤用法」が加わり、旧幕臣の子弟にも学習を課していることは実際生活の要請に応じた措置で、現実的な改正点といえることができる。

続く静岡藩内各所小学校の所轄に関しては、「静岡沼津両学校頭取之管轄にて学業之定課教授法之撰任も右頭取之取捨に有之候得共其外総て校内之諸事ハ小学校頭取之任に有之候事」<sup>198)</sup>と規定されている点も、「新掟書」に加えられた新しい点である。

この他、小学生の人数に応じて事務員や用務員の確保を図ること、小学生から納付された修業料の収支の明細を明らかにし、その通常支出は月番教授方が取り扱い、各所小学校頭取に報告され、各所小学校頭取の責任下で毎月の出納諸勘定書が作成され、静岡学問所・

表17 小学生成績表書式

行	水	剣	体	地	算	手	読	肩書 小学生姓名 年令
状	泳	術	操	理	術	習	書	

沼津兵学校の両学校頭取の下に毎年1月・7月の両期にわたって提出されることになっている<sup>199)</sup>。さらに1月・7月の2回にわたって、一定の書式（「表17」<sup>200)</sup>参照）に「小学生之行状学業之進方等委しく相認」<sup>201)</sup>めて、個々の小学生の学習や生活の記録を同じく静岡・沼津2両学校の頭取に差出すこととしており<sup>202)</sup>、学校内での個々の小学生の教育評価を通じて指導をより確かなものとしようとするなどといった点も、新しい規定で注目される。

こうして「新掟書」制定の明治3年1月より沼津兵学校附属小学校は「静岡藩小学校」と改称され、後に相次いで開校をみた藩立小学校もすべて同一の静岡藩小学校となるわけだが、個々の各地の校称は土地の名前の下に“小学所”を付して「浜松小学所」とか「掛川小学所」といった表現等が用いられている<sup>203)</sup>。

ところが明治4年（1871）7月14日、明治天皇は「朕曩ニ諸藩版籍奉還ノ議ヲ聴納シ新ニ藩知事ヲ命シ各其職ヲ奉セシム然ルニ数百年因襲ノ久シキ或ハ其名アリテ其实挙ラサルモノアリ（中略）朕深ク之ヲ慨ス仍チ今更ニ藩ヲ県ト為ス」<sup>204)</sup>といい、さらに同日、太政官は「藩ヲ廃シ県ヲ置ク」<sup>205)</sup>（法律番号・353）ことを布達した。

そこで旧藩知事はみな就れも東京に移住することとなり、徳川家達も同年8月28日に静岡を離れて上京し、当分の間、旧藩内の事務はすべて「従来の参事以下をして掌理せしめた」<sup>206)</sup>のである。

こうした動きのなかで、すでに考察したように明治4年9月には沼津兵学校は兵部省に移管されており、ここに旧静岡藩内の小学校はすべて静岡学問所の頭取・向山黄村の所掌下に置かれることとなった。

しかも廃藩置県後の旧静岡藩内の各所小学校のすべては「単に徳川家経営の一小学校となり、常費は徳川家より支給せられ」<sup>207)</sup>、維持されていくことになったのである。

## V. 沼津兵学校と同附属小学校との関係

沼津兵学校と同附属小学校との関係は、前者が陸軍将校養成のための専門教育を施そうとしたのに対して、その予備的教育機関としての教育機能の役割を果たすことを期待されて開設されたのが后者であり、両校はまさに一体的な関係にあった。

だが后者にあっては、ただ単に旧幕臣の子弟を対象として「兵学校資業生ノ予備ニ供

シ」<sup>208)</sup>ただけでなく「士農工商ヲ問ハス」<sup>209)</sup>、「広ク少年ノ就学ヲ目的トセシ」<sup>210)</sup>とてあったから、後者での教育は身分的な束縛を克服しようとする一元的な方向を目指していたことがわかる。

さらに注目される点は、後者に入学が許される年齢が沼津兵学校に「入学御免ニ相成候生徒」<sup>211)</sup>の「十四齡五十八歳ニ限」<sup>212)</sup>っていたから、教育段階は中等教育の後期までの学力を養成することが期待されていたことは明白であり、沼津兵学校附属小学校の教育は、初等教育と中等教育の両段階が共存していたことを意味しよう。

他方、沼津兵学校といえば当時にあつては「俗に大学とさへ呼ばれたほど校規整ひ内容充ち、最も進歩的の素地を備へたものであつた」<sup>213)</sup>だけに、兵学校関係者自らも「堂々一箇の大学を以て任じた程」<sup>214)</sup>であつた。

しかも府中（静岡）学問所を開校し、沼津兵学校ともども大学組織となし、静岡藩の東西あいまって、静岡では「文」を、沼津では「武」をそれぞれ主体として、特色ある個性的な教育を展開したのである。

さらに沼津兵学校と同附属小学校との関係を制度的にみると、単純に“大小二層学校教育体制”として把握されるものの<sup>215)</sup>、教育の実体的な面からみると、附属小学校の教育が中等教育段階をも内包しているところから“大中小三層学校教育体制”への伏線もうかがえる点で、学校近代化への志向を明確に目指していたことがわかる。

ところで沼津兵学校と同附属小学校では、別に附属事業を起こしており、その状況は江原素六の次の書簡の一節から知ることができる。

小学読本、算術並代数教科書、日本及万国地図(暗射地図)、イソップ物語及英語教科書を出版せり、兵学校の附属事業として、牧牛場を開き、外国種の牡牛を輸入して、牛種改良に着手せしに、外肉食の醜風を助長し、国体に対し不相済儀に付、速々廃牧すべしとの厳命に接して、困却せしことあり、又銀行を設立し、沼津に本店を設け、清水・横浜・東京各地に支店を開きて、営業したる所、士族が商業に従事することは国体違反なりとて亦速に閉居すべしとの命を受けて遂に廃業したる事もありき<sup>216)</sup>。

また沼津兵学校に關係する記念碑については、元教授方・中根淑撰文、元職員20名、資生61名の出資により明治27年(1894)9月に設立された「沼津兵学校記念碑」(当初は駿東郡沼津町城内・東照宮祠＝現在は沼津市大手町・城岡神社境内)があり(「図3」参照)、いま一つは沼津兵学校創立70周年を記念して昭和15年(1940)11月に沼津兵学校記念会によって建てられた「沼津兵学校址」(沼津市大手町・旧沼津郵便局横にあつたが、郵便局移転により城岡神社境内に移される)の標識碑があり(「図4」参照)、ここでは徳川家正の題字による「沼津兵学校址」の標識碑の裏面にある碑文をみることにする。

#### 「沼津兵学校址」裏面・碑文

明治元年 徳川家達公 移封駿府 先是 幕府奉還大政 麾下士解常職乃起兵学校及附属小学校 於沼津以養成士官為取範欧米為新教育 之先及撤藩献之 政府合於陸軍兵学校寮



沼津  
兵學  
校記  
念碑

富嶽之陽、狩水之上、有名區曰沼津。往時有城、青松白壁與江山掩映、其名特著。明治紀元、東方甫定、朝廷封我德川公於駿河遠江、治于靜岡。是以沼津遂爲靜岡都城矣。公之設封也、其從者如歸市。乃命有司所在安撫、而別聚水陸軍人及子弟俊秀者於斯地、以城充學館、以講兵器。所設課業有數目。曰漢學。曰洋學。曰數理。曰圖畫。曰體操練兵。曰騎。曰泅。俯之一二年、其人彬彬可用矣。以故列國行人之便於靜岡者、必請來觀。或遣其藩人就而學。若廳島德島、特聘吾學官、以訓練士卒。蓋以維新之初、列國學制未備、而沼津兵學爲之垂先也。四年 朝廷徵藩爲縣、以學館合於陸軍兵學寮。於是、在學諸子、半升于 朝、半去而改業。及歷歲月或爲陸海軍將校、或爲院省名官、爲商、爲農、爲衆議院議員、爲銀行公司之長、爲博士、爲學士、爲大小學校之教官、其在朝興否、咸莫不竭力國家、而知名當世者、則昔且苦學之功、至是始彰、而公之欲忠皇室之志亦酬矣。自學館之廢于今二十餘年、同窓之人、歲時相會、每語往事、頗有今昔之慨。恒言。沼津則吾輩起身之地、雖學館廢已久、何能無眷々於懷耶。頃者相議、立石其舊址、請公篆乎額、令淑紀之以永傳後祀。意在不遺其本崗。豈敢誇其多材云哉。

明治廿七年九月

中根淑撰

大川通久書

平田清吉鐫

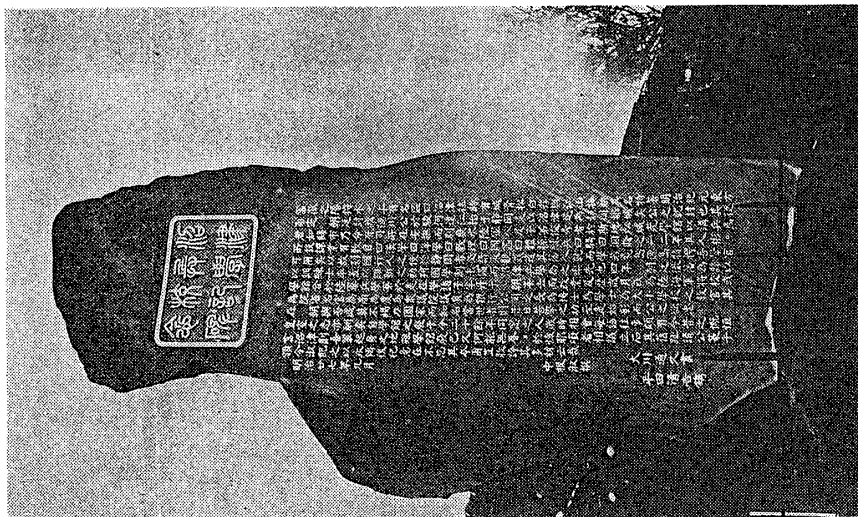


図3 沼津兵学校記念碑と碑文

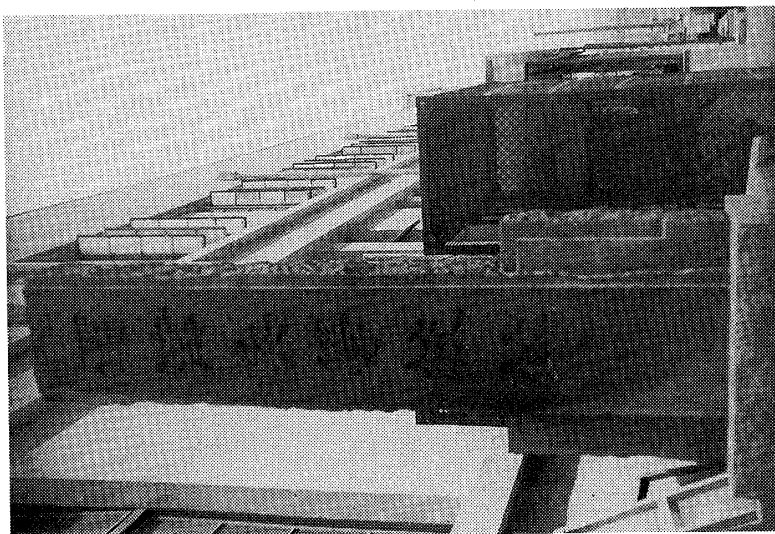


図4 沼津兵学校址  
(旧沼津郵便局横)

惟兵学校開期僅三年有半 生徒不過二百余人 然皆一時之選 新進気鋭 以天下為己 任地日為 將校官吏 供国家之用者濟濟輩出 吾公育英造士之旨 於是達矣 嗚呼偉哉 及今鄉人追思 曩昔之盛事不能禁於懷 為設沼津兵学校創立七十周年記念会 以挙式典又建石於校址 請公爵家正公表題 囑余記念碑陰余亦係幕臣裔誼不可辞也 乃記其緣由以勸後人

公爵 徳川家正 題字      文学博士 鹽谷温撰  
昭和十五年十一月      谷川道正書  
沼津兵学校創立七十周年記念会

## VI. 静岡藩の教育の全国諸藩への影響

静岡藩の教育の全国諸藩への影響をみるに、まず福井藩の場合からみることにする。

福井藩では、明治2年(1869)の時点で「福井藩士永見裕同郷の少年子弟松平八十一、津田東、松原新之助等を率て至り、これをして予備小学校(筆者注・沼津兵学校附属小学校のこと)に入らしめ、又暇時周(筆者注・西周のこと)に請ひて業を授けし」<sup>217)</sup>めた実績を素地として、福井藩の中心校であった「明新館」では維新次後、教育は大いに「静岡の沼津兵学校に範をとり福井藩大参事村田氏寿の努力で発展」<sup>218)</sup>をみている。

続いて徳島藩にあっても、福井藩と同様、「藩費ヲ以テ数十名ヲ選抜シテ来学セシメ徳島藩ノ如キハ更ニ本校ノ人ヲ聘用シ本校ノ教則ニ模倣シテ学校ヲ藩ニ開」<sup>219)</sup>くほどであった。

すなわち、「明治三年十一月に静岡藩沼津小学校頭取心得山田楽を招いて、静岡藩の学制にならい、徳島藩学制」<sup>220)</sup>を編制しており、時の藩知事「蜂須賀茂韶士民ヲシテ普通学ヲ修メシメンカ為メ」<sup>221)</sup>に、「名東郡出来島なる旧藩主隠居所に西小学校を造り、同郡寺島本町に南小学校を設け、同郡助任町に北小学校を置いたのである。これ等の小学校(中略)の規則は(中略)これを読むと、それが静岡藩の小学校に倣ったものであることが判」<sup>222)</sup>る。

また鹿児島藩においても明治4年(1871)1月に、沼津兵学校附属小学校頭取であった「蓮池新十郎が雇用され、その意見に基づき、学制に根本的改革が加えられ、従来の和・漢・洋三局鼎立の制が改められ、本学校一小学校制が確立」<sup>223)</sup>されている。

そして改正のねらいとして、普通学を履修して将来国家有為の人材育成の基礎を固めることにあり<sup>224)</sup>、さらに「本学校は一面においては、小学校・郷校の上級学校の性質を帯び、和・漢・洋三学兼修の中等程度の学校であり、また一面、一八七五(明治八)年五月新設された学務課に引き継がれるまで、教育行政の部門を担当したもので、県下の小学校・郷校を管轄する教育行政の中心機関であった」<sup>225)</sup>のである。

ところで、蓮池新十郎が鹿児島藩に招かれた当時の事情の一端については、明治4年4月9日付＝内田正風・黒田清綱両氏宛伊知正治書簡の一節によって知ることができる。

近頃静岡の人蓮之池先生御頼入候て、学校御取興相成候所、小学三ヶ所にて生徒六百名、外に郷校十三ヶ所、本校に不相替盛なるもの三ツ余、逐々相調候様子、生徒千八百余、

五ツより七ツ時迄（午前八時—午後四時）毎日の勉強目覚敷次第に御座候。尤先生才徳兼備頗る賢者の風ある故、諸人一同納得無此上幸甚御座候<sup>226)</sup>。

この他、静岡藩の教育の感化を受けた諸藩をみると、名古屋藩<sup>227)</sup>・芸州藩・紀州藩<sup>228)</sup>、さらには甲斐<sup>229)</sup>にも影響を及ぼしているが、ここでは津和野藩の場合をさらにみてみることにする。

すなわち、津和野の地は西周の郷里であり、明治2年12月下旬に西は「津和野に至る。（中略）三年正月より二月に至るまで、茲監（筆者注・津和野藩主の亀井茲監のこと）頻りに周を召して、学政を諮詢す。郷人も亦多く来りて西洋の學術風俗を問ふ。二月中周文武学校基本並規則書を草して茲監に上る。其体裁小学より起り、文は国文学、外国文学、政治法律歴史道德医薬の諸科に至り、武は歩騎砲工の諸科に至る。皆課程表を附したり」<sup>230)</sup>。西は明治3年1月、津和野を発しているが、西が藩主の下に献じた「文武学校基本並規則書」に盛られた学校構想は「徳川家兵学校追加規則」に準じたものであり<sup>231)</sup>、津和野藩のその後の教育は必然的に静岡藩の教育を下敷きにしたものとなっていた。

また弘前藩にあっても、静岡藩庁へ中村敬太郎（正直）の来任を懇願しているが、「もとより来るはずもなく、その推薦で漢学の宮崎立玄と英学の島田徳太郎とを得」<sup>232)</sup>ている。

さらに全国「各藩より東京に往来するもの必ず足を沼津に留め本校（筆者注・沼津兵学校のこと）を参観して敬意を表した」<sup>233)</sup>という。

いま一つ、静岡藩の教育の全国への影響をみるのに見落せぬものに静岡学問所や沼津兵学校の関係者による著訳書の刊行による感化である。

ここに『新刻書目一覧・一』（明治3年庚午仲春）及び『新刊書目一覧・二』（明治4年辛未4月）中にある静岡藩関係者の手になる著訳書を抜き出すと、「表18」<sup>234)</sup>のようになる。

しかして、「第一に挙ぐべきは数学の泰斗たりし塚本明毅の『筆算訓蒙』であ」<sup>235)</sup>り、しかも本書は「その出版年代も古く、内容もすぐれ、普及の点からも（中略）当時の代表的

表18 静岡藩関係者著訳書一覧

『新刊書目一覧・一』	
杉田玄端訳『痘瘡金針』	
渡辺一郎訳『陸士官必携』	一〇冊
塚本恒甫編撰『筆算訓蒙』	五冊
『新刊書目一覧・二』	
静岡藩蔵板『白文四書』	一〇冊
ラ子ル氏原著『地学初歩』	一冊
渡辺一郎校正『陸軍士官必携』	一〇冊
渡辺一郎訳『英仏単語篇註解』	一冊
柳河春三合訳『英仏単語篇註解』	一冊
渡辺一郎蔵板『英文典』	一冊
渡辺一郎蔵板『英吉利会話篇』	二冊
フアンテルヘル氏原著『英吉利会話篇』	一冊
渡辺一郎校『英吉利小文典』	一冊
モルレー氏原著『英吉利小文典』	一冊
中村敬太郎訳『自助論セルフヘルプ』	
渡辺一郎編『西洋蒙求』	一冊

な筆算書で（中略）和算臭もなく、新しく編述された組織的な構成をとった初期の筆算書としての特色をも」<sup>236)</sup>ち、「その内容の構成は、一題目ごとに一般的説明、つぎに例題をあげて解法を示し、その後に練習をかがてい」<sup>237)</sup>た。

また渡辺一郎（温）の訳書の多いことも注目される。

渡辺の「沼津在住は約三ケ年であったが、その間、教授と著作に注目すべき活躍をした」<sup>238)</sup>ことを裏付けるように、「沼津兵学校時代に、温が出版した書籍は、十種を越えて」<sup>239)</sup>おり、その中の8冊がここに列挙されている。そして後に渡辺が文部省に出仕し、さらに長崎英語学校校長兼師範学校校長、東京外国語学校校長を歴任するだけに、その基盤が沼津時代に培われていたことがうかがえる<sup>240)</sup>。

さらに『書目一覧』中で目立つのは、中村敬太郎訳の『自助論』一名『西国立志編』（全11冊）の刊行が“駿河国静岡藩”で刊行をみていることである。（「図5」参照。筆者蔵）

中村は、「明治元年六月イギリスから帰るとすぐに（中略）静岡に参り（中略）学問所の一等教授とな」<sup>241)</sup>ったが、「即ち、昼は学校に教鞭を執り、夜間晩前、全く世事を謝絶して、帖々文を訳述し、訳成る毎に、夫人高橋氏、傍より文を浄書して其業を助け、漸くにして稿成れり」<sup>242)</sup>、『西国立志編』がこれであった<sup>243)</sup>。

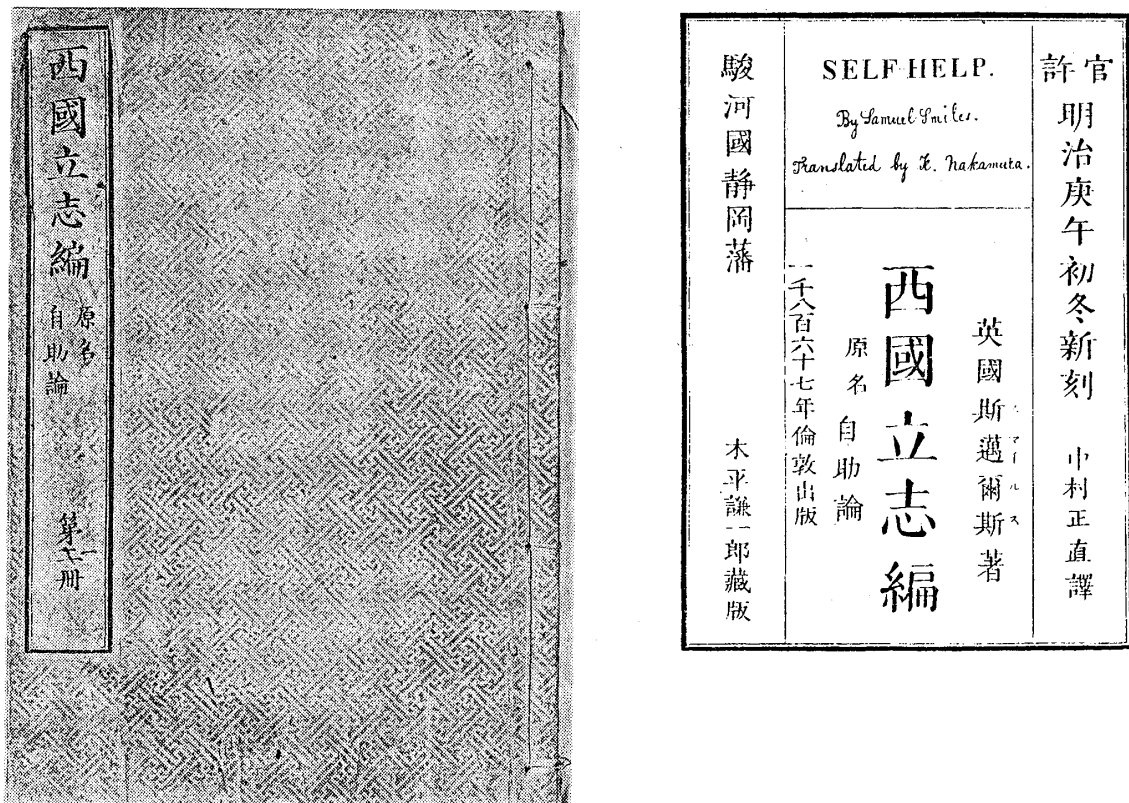


図5 『西国立志編・第一冊』表紙と扉（筆者蔵）

ここにおいて、「当時、<sup>はんぎ</sup>割刷師の、各地より静岡に移行する者多かりしと、藩校の事務員木平氏は、書林との交渉其他外交方面の庶務を担当し」<sup>244)</sup>ており、「同書に静岡藩木平謙一郎蔵版の題記あるは、これが為め」<sup>245)</sup>であった。

中村は続いて『自由之理』、『西洋品行論』等を続刊す。『自由之理』は民権の研究にして、『品行論』は『立志編』の補翼の如きもの（中略）。亦社会の歓迎する所と為り、売れ行き前書に譲らず、都て数十万冊を發行]<sup>246)</sup>する程の好評を得た。

かくして、「世人、福沢氏の西洋事情、内田氏の輿地誌略と、先生の西国立志編とを併せて、発売数の多かりし、明治の三書と為」]<sup>247)</sup>したのである。

## むすび

幕藩体制の頂点に立っていた徳川家の権力が喪失し、明治維新政府（中央単一政権）の成立に伴って、徳川家は駿河・遠江・三河地方に70万石を得て転封され、そこで徳川家が着眼したのが教育事業であり、本稿ではその総体の解明を目指した。

すなわち、府中（静岡）学問所や沼津兵学校と同附属小学校をはじめ、静岡藩立の小学校の開設が主たる教育事業であり、静岡藩における教育活動をみると、そこには、藩主・徳川家達と彼を支えた旧幕臣首脳らが、徳川支配地内の府中（静岡）と沼津を中心とする藩内各地で、その後の日本の文化の進展を担う人材を大いに養成しようとした気概を汲み取ることができる。そして、それが、日本の伝統的な教育を保持しつつも、欧米先進文明の長所を英学と仏学を通じて受容し、その成果を果敢に駆使して人材を輩出させていく期待をこめて学校を出現させた。しかも、そこで展開された教育は他の全国諸藩にも感化を及ぼさずにおかなかった先進性がみられた。さらに沼津兵学校附属小学校は、明治維新より「学制」頒布をみるまでにみられた、わが国での文字通り先駆的な初等教育機関としての役割までも果たしていたのである。

だが廃藩置県の断行によって、静岡藩をはじめとする全国諸藩に存在した独自性と主体性をもつ地方中等教育機関が、その約38%に減少する事態を生み<sup>248)</sup>、進展をみせ始めていた明治維新期のわが国中等教育に大きな打撃を与えていくことになるのである。

## 〈注〉

- 1) 『法令全書』中に「徳川亀之助に家名相続の旨の被仰出書」（慶応4・閏4・29）・「徳川亀之助に七十万石下賜」（慶応4・5・24）の記録がある。
- 2) 福地源一郎『懷往事談・全』（明治27年）、192頁。
- 3) 静岡県静岡市役所編纂「明治維新当時の静岡」（『静岡市史編纂資料・第4巻』昭和2年）、126頁。
- 4) 『駿府藩官員録』（明治2年・静岡県立中央図書館蔵・請求記号S280-15）（「図6」参照）
- 5) 池田宏代表編纂『大森鐘一』（昭和6年・再版）、203-206頁。
- 6) 池田宏代表編纂、前掲書、206-207頁。

ここに記述されていることを実証すべく、静岡県立中央図書館・葵文庫に所蔵されている旧幕府蔵書をみると、「蕃書調所」「開成所」「昌平坂学問所」「外国方」「陸軍方」といった蔵書印が押されている。（「図7」参照）

- 7)～8) 静岡県編輯『静岡県治紀事本末・巻16』（原本第3冊の内・内閣文庫蔵）

なお、ここに『静岡県治紀事本末』というのは稿本原形で『静岡県史料』をいい、内閣文庫蔵35冊に及ぶものである。

図6 『駿府藩官員録』(明治二巳年正月新刻)



図7 旧幕府蔵書棚(静岡県立中央図書館・葵文庫)



- 9) 静岡県静岡市役所編纂、前掲書・第4巻、139-147頁参照。
- 10) 静岡県静岡市役所編纂、前掲書・第4巻、149頁。
- 11)～13) 静岡県編輯『静岡県治紀事本末・巻16』。
- 14) 静岡県静岡市役所編纂、前掲書・第4巻、153頁。
- 15) 池田宏代表編纂、前掲書、207-210頁。
- 16)～18) 静岡県編輯『静岡県治紀事本末・巻16』。
- 19) 教育史編纂会編修『明治以降教育制度発達史・第4巻』(昭和13年)、152頁。
- 20) 静岡県静岡市役所編纂、前掲書・第4巻、151-152頁。静岡県立教育研修所編『静岡県教育史・通史篇上巻』(昭和47年)、169-171頁。
- 21) 静岡県編輯『静岡県治紀事本末・巻16』。
- 22) 文部省総務局編『日本教育史資料・壱』(明治23年)、191頁。

なお、本書に関しては、玉川大学出版部から刊行された日本教育史資料研究会編『「日本教育史資料」の研究』(1986年)参照。

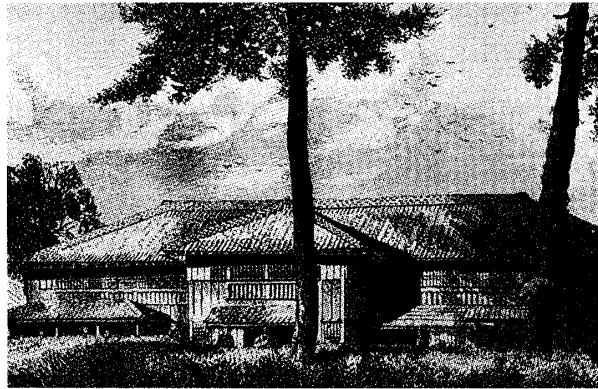


図8 静岡学問所

(From E.W. Clark: Life and Adventure in Japan, 1878・  
ハワイ大学図書館蔵〈請求記号 DS809・C59〉)

- 23) 静岡県編輯『静岡県治紀事本末・巻16』。
- 24)～26) 文部省総務局編、前掲書・壱、190頁。
- 27)～28) 文部省総務局編、前掲書・壱、191頁。
- 29)～30) 静岡県編輯『静岡県治紀事本末・巻16』。

なお、ここにある「米国人教師御雇」とあるのは E.W. クラークのことで、彼についての詳細は影山昇「明治初年の静岡藩お雇い外国人教師 E.W. クラーク」『愛媛大学教育学部紀要 I・第27巻』(昭和56年2月)参照。

- 31)～32) 静岡県編輯『静岡県治紀事本末・巻10』(原本第12冊の内・内閣文庫蔵)
- 33) 静岡県静岡市役所編纂、前掲書・第4巻、137-138頁。
- 34) 橋尾四郎「明治初年の教育事情」(静岡県教育委員会編『教育広報・第200号』昭和45年11月)、68頁。
- 35)～36) 静岡県駿東郡役所編纂『静岡県駿東郡誌』(大正6年)、560頁。

なお『日本教育史資料・壱』中「旧静岡藩兵学校・沿革要略」には、「明治元年徳川氏駿遠参ノ地ニ封セララルヤ即陸軍将校ヲ養成スルノ目的ヲ以テ同年十二月本校ヲ開創ス時ニ権大参事服部綾雄総括ヲ以テ学校ヲ管理シ而テ少参事阿部潜藤沢次謙江原素六権少参事矢田堀鶴ノ四名共ニ陸軍用重立取扱ヲ以テ創立ニ尽カス就中阿潜拮据周旋ノ功殊ニ多シトス」(同書・192頁)とある。

- 37)～38) 大久保利謙編『西周全集・第3巻』(昭和41年)、781頁。

なお、西周が沼津兵学校と関係をもつ時期の「年譜」には、次のように記されている。

「明治元年戊辰、四十歳。…陸軍学校頭取となりて沼津に往き、城内に住む。

明治二年己巳、四十一歳。始めて周と称す。家達静岡藩知事となり周を挙げて少参事格軍事掛となす。

明治三年庚午、四十二歳。徴されて東京に入り、兵部省出任を拝し、少丞に準ず。学制取調掛を兼ね。」(森林太郎『西周伝』明治31年・150頁)

39)～40)「西周・履歴集」(大久保利謙編、前掲書・第3巻)、826頁。

41) 森林太郎、前掲書、113頁。

42) 文部省総務局編、前掲書・壺、192頁。

43) 静岡県立教育研修所編、前掲書・通史篇上巻、204-207頁。

なお、一等教授方の“取締”分担については、大築保太郎が「歩兵科取締」を、塚本桓甫が「砲兵科取締」を、赤松大三郎が「築造科取締」を担当している。(米山梅吉『幕末西洋文化と沼津兵学校』昭和10年〈再版〉・99頁)

44)～45) 明治2年1月25日付「相沢求(湛庵)宛西周助書簡(沼津発信)」(大久保利謙編・前掲書・第3巻)、693頁。

なお西の「明治二年沼津日記断片」には、「正月八日、御開赤飯出ル 同十三日、授業始」(同書・410-411頁)とある。

この記述から、沼津兵学校と同附属小学校はともに明治2年(1869)1月8日に開校し、1月13日から授業が本格的に始まったことがわかる。

46)～47) 大野虎雄『沼津兵学校と其人材』(昭和14年)、8頁。

48) 江原先生伝編纂会委員編纂『江原素六先生伝』(大正12年)、148-149頁。

49) 静岡県駿東郡役所編纂、前掲書、1,204-1,205頁。

50) 沼館愛三「駿東地方に於ける城郭の研究」(静岡県郷土研究協会編輯『静岡県郷土研究・第9輯』昭和12年)、47-48頁。

51)「徳川家兵学校掟書・覚」(大久保利謙編、前掲書・第2巻)、445頁。

52)～53) 文部省総務局編、前掲書・壺、202頁。

なお、沼津兵学校で使用された書籍の一部は沼津市立第一小学校に保管されていたが、沼津市立駿河図書館に昭和39年(1964)に移管され、さらに平成5年(1993)に沼津市立図書館新設に伴い、同図書館に移管され、現在に至っている。該当する蔵書印(筆者調査)は「蕃書調所」「神奈川会所印」「徳川学校印」「駿府学校」「沼津学校」「沼津覺」「明強学舎之印」などであるが、洋書は8冊しか残っていない。

書籍リストは沼津市立駿河図書館『沼津文庫目録』(昭和39年11月現在・謄写)により知ることができる。

54)～55) 江原先生伝編纂会委員編纂、前掲書、149頁。

56)～66)「徳川家兵学校掟書」(大久保利謙編、前掲書・第2巻)、445-461頁。

67) 文部省総務局編、前掲書・壺、202頁。

68)～71)「徳川家兵学校掟書」(大久保利謙編、前掲書・第2巻)、448頁。

72) 大野虎雄、前掲書、10頁。

73) 大野虎雄、前掲書、9頁。

74)～75)「徳川家兵学校掟書」(大久保利謙編、前掲書・第2巻)、449頁。

76)「徳川家兵学校掟書」(大久保利謙編、前掲書・第2巻)、461頁。

77)～78)「徳川家兵学校掟書」(大久保利謙編、前掲書・第2巻)、453-456頁。

79) 文部省総務局編、前掲書・壺、202頁。

80) 米山梅吉、前掲書、110頁。佐久間敏治「沼津の学校」(川村繁則編輯『駿東郡月報・第7号』大正3年12月5日)、17頁参照。

81) 文部省総務局編、前掲書・壺、192頁。



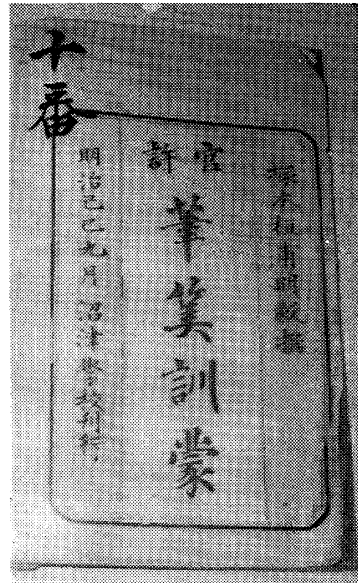


図9 『津算訓蒙』扉

なお、明治2年9月に沼津学校から刊行された塚本恒甫明毅撰になる当時を代表する洋算の教科書『筆算訓蒙』（沼津市明治史料館蔵）の“扉”は「図9」参照。

82) 飯田宏「明治初期の沼津の英学」（『静岡女子短期大学紀要・第4号』昭和32年12月25日）、95-100頁参照。

83)～84)「徳川家兵学校掟書」（大久保利謙編、前掲書・第2巻）、445頁。

85)～92)「徳川家兵学校掟書」（大久保利謙編、前掲書・第2巻）、457-460頁。

93)「徳川家沼津学校追加掟書」（大久保利謙編、前掲書・第23）、470頁。以下「追加掟書」と略す。

94) 大久保利謙「解説」（大久保利謙編、前掲書・第2巻）、754頁。

95)～100)「追加掟書」（大久保利謙編、前掲書・第2巻）、476・470-471頁。

101)～104) 静岡県編輯『静岡県治紀事本末・巻16』。

なお、「駿府（静岡）病院」の詳細については、静岡県静岡市役所編纂、前掲書・第4巻、170-175頁参照。

105) 江原先生伝編纂会委員編纂、前掲書、147-148頁。

106)～113)「徳川家陸軍医学所規則」（複写資料・沼津市立図書館蔵）

114)～116) 静岡県編輯『静岡県治紀事本末・巻16』。

117) 渡辺幾治郎『基礎資料 皇軍建設史』（昭和19年）、2頁。

118)～121) 渡辺幾治郎、前掲書、5-6頁。

122) 丹潔編『大村益次郎』（昭和19年）、765頁。

123) 丹潔編、前掲書、761-762頁参照。

124) 兵部大輔に就任した大村益次郎は兵制改革上の最急務として士官の養成に最大の努力を払っており、その折の「建議」の中の一節である。（丹潔編、前掲書、767-768頁参照）

125) 江原先生伝編纂会委員編纂、前掲書、152頁。

なお、ここにいる「時の陸軍卿」は大村益次郎を指し、訪問の時期は明治2年（1869）の晩夏のことであった。（大野虎雄、前掲書、13頁参照）

126) 森林太郎『西周伝』（明治31年）、117-118頁。

127) 国立教育研究所編「教育関係法令目録・明治篇」（『日本近代教育百年史編集資料Ⅰ』昭和

- 43年)、13頁。
- 128) 山出半次郎 大野虎雄 「沼津兵学校と同附属小学校」(前掲『静岡県郷土研究・第9輯』昭和12年)、78頁。
- 129) 国立教育研究所編、前掲目録・明治編、(『日本近代教育百年史編集資料Ⅰ』)、19頁。
- 130) 静岡県立教育研修所『教育研究・36』(昭和42年3月)、4頁。
- 131) 文部省総務局編、前掲書・巻、192頁。
- 132) 児玉幸多 北島正元 編『物語藩史・第2期第4巻』(昭和41年)、479-480頁。
- 133)~136) 江原先生伝編纂会委員編纂、前掲書、152-153頁。
- 137) 国立教育研究所編、前掲目録・明治編 (『日本近代教育百年史編集資料Ⅰ』)、24頁。
- 138) 大阪にあった陸軍兵学寮は、明治4年(1871)12月7日に校舎を東京和田倉門外に移し、翌5年(1872)12月28日には陸軍兵学寮の中に「士官学校」「幼年学校」「教導団」の3校舎を設けた。そして明治7年(1874)11月2日には「士官学校」は独立して陸軍省の直轄となっている。(渡辺幾治郎、前掲書、57頁)
- 139) 山出半次郎 大野虎雄 、前掲論文(前掲『静岡県郷土研究・第9輯』)、79-80頁。  
 なお、沼津兵学校の資業生66名(指揮に当たった3名を加える)は上京するや彼等だけで陸軍兵学寮内の教導団士兵第1大隊が編成されている。(小山弘健『近代日本軍事史概説』昭和19年、146頁。)
- 140) 山出半次郎 大野虎雄 、前掲論文(前掲『静岡県郷土研究・第9輯』)、80頁。
- 141) 真野文二「沼津兵学校創立七十周年記念に於て」(前掲『県郷土研究・第13輯』昭和14年)、5-6頁。
- 142) 文部省総務局編、前掲書・巻、202頁。
- 143) 山出半次郎 大野虎雄 、前掲論文(前掲『静岡県郷土研究・第9輯』)、88頁。
- 144) 沼津市誌編纂委員会編纂『沼津市誌・下巻』(昭和33年)、36頁。
- 145) 山出半次郎 大野虎雄 、前掲論文(前掲『静岡県郷土研究・第9輯』)、89頁。
- 146) 大野虎雄『沼津兵学校附属小学校』(昭和18年)、5頁。
- 147) 文部省総務局編、前掲書・巻、202頁。
- 148) 山出半次郎 大野虎雄 、前掲論文(前掲『静岡県郷土研究・第9輯』)、89頁。
- 149) 明治2年1月25日付「相沢求(湛庵)宛西周助書簡(沼津発信)」(大久保利謙編、前掲書・第3巻)、693頁。西周「明治二年沼津日記断片」(大久保利謙編、前掲書・第巻)、410-411頁。  
 なお、代戯館の創始より沼津尋常中学校にいたる明治前期の沼津の教育機関の沿革については、沼津市立駿河図書館から刊行された間宮嘉十郎『沼津小学校沿革史』(昭和48年10月)に詳しい。(校注及び解説は四方一瀬)
- 150)~152) 米山梅吉、前掲書、117-118頁。
- 153) 大久保利謙「解説」(大久保利謙編、前掲書・第2巻)753頁。
- 154) 静岡県駿東郡役所編纂、前掲書、578頁。
- 155)~156) 文部省総務局編、前掲書・巻、204頁。
- 157)~160) 「兵学校附属小学校掟書」(大久保利謙編、前掲書・第2巻)、465頁。
- 161) 静岡県立教育研修所編、前掲書・通史篇上巻、236-237頁。
- 162)~165) 「兵学校附属小学校掟書」(大久保利謙編、前掲書・第2巻)、462頁。  
 なお、本「掟書」は明治2年5月に、次の2項が追加されている。すなわち「向後十八歳以下之者は童生と唱へ十九歳以上の者は向後小学員外生と唱可申事」という1項と、修業料の件に関する「尚厄介多等にて修業科差出難き者には嘆願により軽減せらるべき事」という1項である。(山出半次郎 大野虎雄 、前掲論文〈前掲『静岡県郷土研究・第9輯』〉、93頁)
- 166) 文部省総務局編、前掲書・巻、204頁。
- 167) 文部省総務局編、前掲書・巻、203頁。
- 168)~169) 「兵学校附属小学校掟書」(大久保利謙編、前掲書・第2巻)、463頁。

なお、ここで“講釈聴聞”というのは、江原素六によれば、「生徒の実践躬行を大旨として、個人修身を鼓吹する所より、日曜日登校して、修身講話を聴聞せしめた」ことをいう。（静岡県駿東郡役所編纂、前掲書、579頁）

170) 文部省総務局編、前掲書・壺、203頁。

171) 小出弘健、前掲書、145頁。小松醇郎『幕末・明治初期数学者群像（上）』（1990年）、63-65頁。

172)～173) 文部省総務局編、前掲書・壺、203-204頁。

174)～175) 文部省総務局編、前掲書・壺、203頁。

176)～183) 「兵学校附属小学校掟書」（大久保利謙編、前掲書・第2巻）、464-466頁。

184) 文部省総務局編、前掲書・壺、204頁。

185)～186) 拓植清「創設当時の静岡県」（前掲『静岡県郷土研究・第4輯』昭和10年）、191-192頁。

187) 「静岡藩小学校掟書」（文部省総務局編、前掲書・壺）、187頁。以下「新掟書」と略す。

188)～189) 文部省総務局編、前掲書・壺、183-184頁。

190) 沼津兵学校には、同附属小学校とともに、旧幕臣移住者の子弟の就学機会を拡充するのが主な目的で、明治2年末より準備に着手して翌3年1月を期して開校した沢田学校所があって、沼津兵学校頭取の管轄下におかれていた。これと同種のものが万能原にもあって、開校まもなく、付近の村落農家の子弟にも門戸が解放した。「試に当時の生徒数を同校に通学した古老に聞くに、士族の子弟が五、六十人、農家の子供が二十人位か又之を男女別に区分すると男、四、五十人、女二、三十人で合計七、八十人なりし模様であ」ったという。しかも、生徒数が少なかったことで、同一教場で男女共学の複々式の授業が行われている。（大野虎雄「沢田学校所の由来と混同農社の事業」前掲『静岡県郷土研究・第16輯』昭和16年、67-69頁）

191) 静岡県静岡市役所編纂『静岡市史・第2巻』（昭和6年）、563頁。

192) 文部省総務局編、前掲書・壺、190頁。

なお、静岡藩内に藩立小学校が相次ぎ開設されて以降も、「農工商、別ナク総テ藩立学校へ入学スルコトヲ許シ家塾寺子屋等ニテ修業スルハ各自ノ随意ニシテ農民等学事ニ従事スルヲ禁セシ事ナ」きは勿論のこと、家塾・寺子屋の設置についても「奉行里正ノ許可及他ノ検束ヲ不受何人タリトモ自由ニ開設スルヲ得」た。（同書〈壺〉・189頁）

193)～200) 「新掟書」（文部省総務局編、前掲書・壺）、184-189頁。

201)～202) 「新掟書」（文部省総務局編、前掲書・壺）、187頁。

なお、静岡県立中央図書館が所蔵の「静岡藩小学校掟書」〈請求番号・5372-12・写・刊行年不明・全九丁〉をみると、「新掟書」と若干の相違点が見出される。すなわち、「新掟書」にはみられない「読書算術之儀ハ士族ニ而も壯年相成全ク為心得稽古相願候もの并社家出家農其外ニ而稽古相願候分ハ何れも無級稽古人と相唱へ年齢并学業期限無之事」といった規定。また「小学之課程」中で、「新掟書」にはない“皇朝雑史類”が学科に加えられていること、さらに「定式之休業」において、「新掟書」が諸定休日として日曜日を挙げているのに対して、「四九之日」を休業とすることとしている規定などが主たる相違点として指摘できる。この「再修正掟書」とも称すべき史料吟味に関しては、影山昇『静岡県学校史研究(三)・静岡県における明治前期の中学校に関する史的考察』（昭和41年・私版）参照。

203) 校称が所在地名を冠しているところは共通しているが、“小学所”については「小学校」「初学所」「修業所」等といった表現が用いられたところもあって、一定していない。（静岡県編輯『静岡県治紀事本末・巻10』〈原本第12冊の内＝内閣文庫蔵〉、『静岡治紀事本末・巻16』）

204) 拓植清、前掲論文（前掲『静岡県郷土研究・第4輯』）、193頁。

205) 国立教育研究所編、前掲目録・明治編（『日本近代教育百年史編集史料I』）、16頁。

206) 拓植清、前掲論文（前掲『静岡県郷土研究・第4輯』）、194頁。

- 207) 山出半次郎、前掲論文〈前掲『静岡県郷土研究・第9輯』〉、94頁。  
 大野虎雄
- 208) 文部省総務局編、前掲書・巻、202頁。
- 209) 文部省総務局編、前掲書・巻、204頁。
- 210) 文部省総務局編、前掲書・巻、202頁。
- なお、「沼津小学ハ藩士ノ子弟ハ勿論平民モ頗ル入学シ加フルニ諸藩ヨリ来学セシトノ及ヒ駿遠ノ各地ヨリ募集セシ生徒皆先此校ニ入学スルニヨリ生徒大ニ増加シテ四百余名ニ至」(同書〈巻〉、202-203頁)るほどの盛況であった。こうした状況に対処する意味もあって、明治3年4月には、赤松大三郎の設計による瓦葺2階建ての新築校舎が沼津城丸馬門外の劃の地に落成、校地面積306坪、建築150余坪、教室数12、座席は高机腰掛式の近代的な設備が新しく整備されている。(山出半次郎、大野虎雄、前掲論文〈前掲『静岡県郷土研究・第9輯』〉、89頁)
- 211)～212)「徳川家兵学校掟書」(大久保利謙編、前掲書・第2巻)、446-447頁。
- なお、沼津兵学校に学んだ「資業生二百十余人の中、此小学校(筆者注・沼津兵学校附属小学校のこと)の門を潜りたる者百五十余名、蓋し予備校として完全に責務を尽したるものと謂ふ」ことができよう。(江原先生伝編纂会委員編纂、前掲書、143頁)
- 213) 米山梅吉、前掲書、96頁。
- 214) 米山梅吉、前掲書、117頁。
- 215) 橋尾四郎「沼津兵学校(附属小学校)考」(『日本教育学会第21回大会＝発表・提案要旨集録』〈昭和37年〉では、沼津兵学校と同附属小学校との関係を、「『大中小』の三層的思考ではなくして、『大小』の二層的思考である」(30頁)と指摘している。
- 216) 静岡県駿東郡役所編纂、前掲書、579頁。
- 217) 森林太郎、前掲書、114頁。
- 218) 本山幸彦編『明治前期学校成立史』(昭和40年)、15頁。
- 219) 文部省総務局編、前掲書・巻、192頁。
- 220) 徳島県教育委員会『徳島教育八十年史』(昭和30年)、9頁。
- 221) 『阿波国教育沿革史・上編』(内閣文庫・和44818号)、43頁。
- なお、本書には「徳島藩小学校規則」(同書・46-48頁)が掲載されている。
- 222) 乙竹岩造『日本教育史の研究・第1輯』(昭和10年)、538-539頁。
- なお、本書では「静岡藩小学校掟書」と「徳島藩小学校規則」とを比較して、その類似性を論証している。(同書・527-544頁参照)
- 223) 鹿児島県教育委員会『鹿児島県教育史』(昭和36年)、11-12頁。
- 224)～226) 鹿児島県教育委員会、前掲書、11-13頁。
- 227) 文部省総務局編、前掲書・巻、192頁。
- 228)～229) 江原先生伝編纂会委員編纂、前掲書、154-155頁。
- なお、当時は諸藩への「御貸人」という制度があったから「諸藩に於ては当時兵制改革の当事者に乏しきのみならず、海陸の士官には殊に缺乏しゐたるを以て、沼津兵学校の名声諸藩に伝播さるるや、諸藩争うて教師を招聘するに至」ったのである。(同書・154頁)
- 230) 森林太郎、前掲書、116-117頁。
- 231) 大久保利謙「解説」(大久保利謙編、前掲書・第2巻)、754-757頁参照。
- なお、「文武学校基本并規則書」は同書(486-508頁)に収められている。
- 232) 武田勘治「日本私立中学校史上の若干の事実」(東京私立中学商業学校振興協会・私学教育研究所編『日本私学史研究委員会・第3次報告』昭和39年)、57頁。
- 233) 米山梅吉、前掲書、90頁。
- 234) 明治文化資料叢書刊行会編『明治文化資料叢書・第7巻・書目編』(昭和38年)、5・13・16・19・27・29・32各頁。
- 235) 米山梅吉、前掲書、136頁。

236)～237) 東京書籍株式会社社史編集委員会編『教科書の変遷』(昭和34年)、97-98頁。

238)～240) 飯田宏「明治前期の沼津の英学」(『静岡女子短期大学紀要・第4号』昭和32年)、95-96頁。

なお、渡辺一郎(正確には「渡部」)の生涯については、片桐芳雄「幕末明治の洋学者・渡部温(一郎)覚え書き(1)～(3)」(『愛知教育大学研究報告・第32～34輯』1983～1985)が詳しい。

241) 大久保利謙「明治文化史上における静岡」(明治文化研究会編『明治文化研究・第3集』昭和44年)、26頁。

242) 石井民次『中村正直伝』(明治42年)、62頁。

なお、明治天皇が洋学習得のために、手にされた最初の本は、「サミュエル・スマイルスの『自助論』(Self-Help)だ。天皇は英語を学ばなかったので、明治四年の十月に静岡で刊行された敬字先生中村正直の訳本『西国立志編』がそのテキストにもちいられた。これは、のちに明治の聖書といわれたほど、深大な感化を全日本にあたえた」のである。(木村毅「明治維新のころ・天皇のカリキュラム①」〈『朝日新聞』夕刊、昭和46年10月15日付〉)。

243)『西国立志編』について静岡県立教育研修所編・前掲書・通史篇に、「この書は明治四年七月静岡で木版印刷され、静岡の書店七軒町の須原屋と江川町の本市から発売され」(同書・295頁)たもので、「初版の発行は明治三年十一月で、四年七月に全部を出版した」(同書・296頁)とあるが、本論稿「図5」(36頁)でみるように、「明治庚午初冬新刻」つまり明治3年初冬、官許を得て『西国立志編』(全11冊)はすでに発行されている。

244)～245) 石井民司、前掲書、64頁。

246)～247) 石井民司、前掲書、66頁。

なお、静岡市大岩の旧静岡大学文理学部正門前にある臨済宗妙心寺派「富春院」前には、中村正直の「尚志」と題する記念碑があり、次のような碑文が刻まれている。(「図10」参照)

「江戸川聖人中村敬字先生が明治ノ初年西国立志編自由之理ヲ訳述セラレタシ旧宅無所争  
斎ノ跡址ヲ距ル北百二十歩左ニ入ル三十歩

大正十五年六月 有志者建」

248) 影山昇『日本近代教育の歩み―幕末維新期の教育の展開―』(平成4年・3刷)、77頁。



図10 中村正直の記念碑「尚志」(静岡市大岩・富春院前)

明治初年・徳川教育略年表

年 号 (西暦)	徳 川 家 の 教 育	国 内 の 教 育
慶応 4 明治 1 (1868)	<p>5・24 徳川家達、駿河・遠江・三河七十万石に封ぜられる。</p> <p>8・15 徳川家達・駿府に到着。</p> <p>9・8 徳川家達、四ツ足御門内御定番屋敷に学問所を開き国・漢・洋三学教授の旨を布令。</p> <p>9・ 沼津で代戯館が開校。</p> <p>10・12 府中学問所、15日より漢学開講を布令。</p> <p>10・ 沼津兵学校頭取に西周が任命される。</p> <p>11・5 府中学問所、15日より洋学開講を布令。</p> <p>11・8 府中学問所頭に向山黄村・津田真一郎両名が任命される。</p> <p>12・5 来たる8日からの沼津兵学校開校布令が出る。</p> <p>12・8 沼津兵学校と同附属小学校の生徒募集。</p> <p>12・20 「徳川家兵学校附属小学校掟書」制定。</p> <p>12・ 「徳川家兵学校掟書」同「覚」制定</p>	<p>1 戊辰戦争開始。維新政府は開国和親を布告する。</p> <p>2 維新政府は京都に学校掛を置き、玉松操ら国学者を任命する。</p> <p>3 五箇条の御誓文。</p> <p>閏4 政体書制定。(太政官に七官を置き、地方を府・藩・県に分ける。)</p> <p>4 福沢諭吉は、福沢塾を芝新銭座に移して、慶応義塾と改称する。</p> <p>6 維新政府は、旧幕府の医学所を復興。続いて学問所(昌平学校)も復興する。</p> <p>7 江戸を東京とする詔書が出る。</p> <p>7 維新政府は、旧幕府の開成所の理化学施設を大阪に移して舎密局と称した。</p> <p>9 明治と改元して一世一元の制を定める。</p> <p>9 維新政府は、旧幕府の開成所を復興し、さらに京都に皇学所と漢学所の設置を決定する。</p> <p>10 箕作麟祥が維新政府の学校取調御用掛に任命される。</p>
明治 2 (1869)	<p>1・8 沼津兵学校と同附属小学校の「御開赤飯出ル」(西周『明治二年沼津日記断片』)。</p> <p>1・ 藩内の府中・浜松・沼津・掛川・横須賀・田中・相良・小島・中泉・赤坂(三河)・横須賀(三河)の11か所に奉行を任命。</p> <p>3・ 「陸軍医学所掟書」制定。</p> <p>6・17 徳川家達、静岡藩知事に任命される。</p> <p>6・20 府中を静岡と改称する。</p> <p>9・ 塚本明毅(旧名を桓輔・桓甫といい、寧海と号す)撰『筆算訓蒙』(沼津学校)刊行。</p>	<p>2 維新政府、「府県施政順序」の中で小学校設立を奨励する。</p> <p>3 天皇、東京に置く。(東京奠都)</p> <p>3 昌平学校に府県学校取調局を置く。</p> <p>5 京都府の上京第二十七番組小学校が開業し、同年中に64の番組小学校が設立される。</p> <p>6 書籍奉還。</p> <p>6 昌平学校を中心に、開成・医学の両学校を大学校分局とし、大学校が設立されたが、維新政府は大学校に高等教育と教育行政の二つの機能を兼ねさせた。</p> <p>7 官制の改革をし、二官六省(神祇官・太政官・民部省・大蔵省・兵部省・刑部省・宮内省・外務省)の制を採用する。</p> <p>12 東京・横浜間の電信線開通。</p>

明治 3 (1870)	<p>1・ 「静岡藩小学校掟書」(「新掟書」)制定。</p> <p>7・ 静岡・沼津・田中・小島・掛川・浜松・新居・横須賀・相良・中泉などに小学校を建設する旨の布達を出す。</p> <p>7～9 (推定) 「静岡藩小学校掟書」(「修正掟書」&lt;静岡県立中央図書館蔵&gt;)が部分的に修正される。</p> <p>9・15 静岡学問所の構内に小学校が設立される。</p> <p>9・20 弁官書により西周・津田真一郎の兩名御用により上京。</p> <p>9・28 西は兵部省出仕少丞准席を命ぜられ、学割取調御用掛を兼ねる。</p> <p>11・30 塚本恒甫、沼津兵学校頭取に任命される。</p> <p>初冬 中村正直訳『西国立志編(原名・自助論)』、静岡で刊行。</p>	<p>12 維新政府は、大学校を大学、開成学校を大学南校、医学校を大学東校と改称する。</p> <p>1 「治数を明らかにし惟神の大道を宣揚すべし」との大教宣布の詔を発する。</p> <p>2 「大学規則」および「中小学規則」を定める。</p> <p>5 舎密局は「学則」を改めて理学所(校)と改称される。</p> <p>6 東京府では、府下に6小学校を開設する旨、布達する。</p> <p>7 大学東校を閉鎖する。</p> <p>8 大学南校では、最初の海外留学生として4名を米国に派遣する。</p> <p>9 維新政府、東京府下に中学校を開設する旨、布告。 この頃、ミス・キダーは、横浜のヘボン施療所で女子教育を開始する。</p> <p>9 平民に氏の称を許す。</p> <p>10 工部省を置く。</p> <p>11 京都府では、大学校代を「中小学規則」に準じた中学校に改編して設立することに決め、12月に開校させる。</p> <p>12 「海外留学生規則」が定まる。</p> <p>3 慶応義塾、芝三田に移る。</p> <p>4 「戸籍法」を定める。(明治5年2月より実施=壬申戸籍)</p> <p>7 廃藩置県。太政官制を改め、正院・左院・右院を置く。</p> <p>7 大学を廃し文部省を設置する。 直ちに大学南校と大学東校を文部省直轄にして、単に南校・東校に改称する。</p> <p>8 穢多・非人の称を廃止する。</p> <p>9 学制改革のために南校と東校を一時閉鎖するが、10月に再開する。 この月、文部省に博物局を置き、湯島聖堂を博物館とする。</p> <p>10 名古屋県に義校が開設される。</p> <p>11 岩倉大使一行に文部大丞田中不二麿(理事官)随行、米欧諸国歴訪の途につく、あわせて5名の少女の米国学実現。</p> <p>12 文部省では学制取調掛11名を任命する。(後に1名追加される。)</p>
明治 4 (1871)	<p>7・14 廃藩置県の断行により、静岡藩は静岡県となる。</p> <p>9・ 沼津兵学校、兵部省に移官。</p> <p>12・16 沼津兵学校は沼津出張兵学寮と相唱えることになる。</p> <p>この年、米国人 E.W. クラークは静岡学問所に附設された「伝習所」の理化学担当の教師に雇われる。</p>	

<p>明治 5 (1872)</p>	<p>5・3 陸軍省、沼津出張兵学寮を引払 わせる。</p> <p>5・11 兵学校生徒、隊伍を組んで沼津 を離れ、沼津兵学校は名実とも に消滅。</p> <p>8・3 静岡学問所閉鎖。</p> <p>9・ E.W.クラーク「諸県学校ヲ顧慮 スルコトヲ勸メル建議」を文部 省に提出する。</p> <p>10・ 米国人 E.W.クラークは雇用期 限中につき英仏理化の学校を置 きたい旨の伺を出し、許可され る。</p>	<p>2 兵部省を廃し、陸・海軍二省を置く。</p> <p>3 神祇省を廃し、教部省を置く。</p> <p>2 東京に官立女学校が設置される。</p> <p>4 京都府では新英学校と女紅場を開設 する。また、東京に、札幌農学校の 前身である開拓使仮学校が開校さ れ、北海道開拓に従う専門技術者養 成をはかる。(9月には女学校を併置 する。)</p> <p>この月、明治天皇は東校に行幸する。 (学校行幸の最初)</p> <p>5 文部省、東京に師範学校を設置。(8 月にスコットを招き、9月に開校す る。)</p> <p>6 東京湯島博物館内に書籍館が開設さ れる。(のちに帝国図書館となる。)</p> <p>8 維新政府は「被仰出書」を公布して 「学制」の理念を明らかにし、文部省 も国民教育制度に関する教育法令で ある「学制」(六篇百九章)を頒布す る。</p>
------------------------	--	---

備考・年表作成に際しては、本文の記述のほか「明治期・静岡県教育史年表」(静岡県立教育研修所『教育研究36』昭和42年3月)、静岡県立教育研修所『静岡県教育史・年表統計篇』(昭和49年)及び拙著『日本近代教育の歩み』(平成4年・3刷)を参照した。